
Six Feet Under

蝶野夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i x F e e t U n d e r

【Nコード】

N 6 6 2 4 0

【作者名】

蝶野夜

【あらすじ】

アンデッド・ハンターを教育する聖ソール学園からの命令で街に出た訓練生のエレインを墓地で待ち受けていたのはアンデッドでもネクロマンサーでもなく……現代ダークファンタジーっぽいですが、多分。

Prologue

今でも不意に思い出す。

サイテーな初恋を。

そんなに昔のことでもないのに、とても遠く感じる。

もう戻ることはない日々、何もかも、バラバラになってしまった。

初めてのキスの味は甘くなかった。

暴力的で、獣臭い、血の味のキス。

温もりは生々しく、妙に力強かった。

そのまま全てを捧げてしまいたくなるほどに。

唇が離れて、乱暴に自分の唇を拭いながら、あたしは顔を上げる
ことができなかった。

ただ待っていたのに、そいつは何も言わなかった。

あたしが舌を噛んだから喋れなくなっただけでもないだろうに。

「……何だよ？」

やっと、絞り出した声は情けないくらい震えていた。

悲しいのか、悔しいのか、何も分らない。

「さあな」

そいつは何事もなかったかのようにはぐらかした。「理由なんて
いらねえだろ」って、いつものセリフが聞こえてきそうだった。

あたしたちの関係は不健全だけど健全で、こんな間違いが起こる
はずもなかった。

お互いに学校中に疎まれて、そいつだけはあたしを蔑まなくて、
だから、一緒にいるようになった。

そいつは、あたしを女として見ていなかったから、楽だった。

それなのに

「わけわかんないわよ……！」

裏切られたような気分で、そいつを睨む。

愛情も友情もない、そんな関係だった。信じていたわけでもない。裏切りさえ意味のないものなのかもしれない。

「だろうな」

そいつは笑った。今まで見たことのない笑みを浮かべて、あたしを見ていた。

今までそいつを男として見たことはなかった。性的な魅力なんて感じなかった。

なのに、今は情欲を宿した目にぞつとする。

「あんたってホント、サイテー」

吐き捨てても、不快感は消えてくれない。

そう言えば、最近妙に余所余所しくなったとは思ってた。

あたしの勘がどれくらい鋭いかをよく知ってるくせに、はぐらかそうとした。

この前、「誰か好きな子でも出来たの？」って聞いたけど、「そんなんじゃねえ」って言って、それ以上何も言わせようとしなかった。

「俺が憎いか？」

「馬鹿にしないで！」

憎い？

そんなのわからない。何もかもがわからない。

「てめえは俺が知る限り、サイコーに気高い女だ」

何を言ってるのかわからない。

何を考えてるのか全然わからない。

その表情の意味がわからない。

「だから……だから、陥落させるの？」

あたしを地の底まで落としたい人間はいくらでもいる。

この男もあの女と寝たわけ？

どんな嫌がらせを受けても泣きたいって思わなかったのに、今はそんな気分。

涙はもう涸れ果てて、泣き方さえ忘れたと思ってたのに。

延ばされた手が頬を掠める。

「じゃあな、エレイン　愛してたぜ」

払いのける前に手は離れた。

背を向けて、そいつはそのままいなくなった。

学園を辞めた。否、裏切った。

あたしの敵になった。

そして、あたしの初恋は知らない間に始まっていて、気付いた時に終わった。

Out of the mouth comes evil.

窓の外、一枚ガラスを隔てた向こう側で景色が流れる。何もかもが過ぎ去っていく。

車に乗るのは久しぶりだった。

最後に街に出たこと自体、随分と昔のことのような気がする。

あの場所はあたしにとって牢獄だから無理もない。

けれど、浮かれられるような状況じゃない。

これだって任務なのだから塀の中のお勤めと変わらない。

街で色々ショッピングできたら楽しいかもしれないのに、あたしはこれから全く美しくない奴らを相手にしなきゃいけないような面倒臭いお仕事。

腐臭を漂わせ、冷たく暗い地中から這い出してきた奴ら　アンデッド。

あたしはそれらを滅するためだけに生かされている。

あるいは、それらを使役するネクロマンサーを。

今回に限って最優先する対象は少し違うけれど。

あたしの所属は聖ソール学園、そこでアンデッド・ハンターとしての教育を受け、卒業後もこき使われ続ける運命ってわけ。

その呪縛から逃れられることはない。

「ねえねえ、エレイン。さっきのってどういう意味？」

隣から聞こえる声がうるさい。

まるで子供みたいに馴れ馴れしくて、煩わしい。無視。

「エレインってば！」

エレイン、それがあたしの名前。学園では気違いエレイン^{マッド}って呼

ばれることもしばしば。

「……何？」

そつちを見るのは面倒臭くて、窓の向こうを見たまま返事をした。
「面倒臭い女は嫌、ってオフィスでボスに言つてたじゃん」

そう言えば、言つたつけ。残念ながら、全く聞き入れてもらえなかつたわけだけど。

「あんたみたいなのがパートナーなんてお断り、って言ったの」
こんなうるさいだけの女がパートナーなんて馬鹿馬鹿しすぎる。
「えゝつ、私だつてねえ、ハンターなんだよ？」

彼女は不満があるみたいだつたけど、文句を言いたいのはあたしの方。

「一体でも倒せたら認めてあげる」

この時点で彼女を認めることはできない。ただの運転手だつて言うならまだ納得できたけど。

多分、実際に仕事をしてもらえないと思う。

「あのさ、色々聞きたいことあるんだ」

「黙ってくれる？」

相手が年上だろうと関係ない。

学園と関係のあるハンター集団“グレイヴ・キーパー”の一員だろうと何だろうと、どうだつていい。

どうせ、学園もその分野に関しては自分のところが一番だと思つていて、これも協力してもらっているのではなく、協力させてやっているのだということになるのだから。

彼女はボスからあたしのお守りを仰せつかっているけれど、あたしは学園から彼女を案内係と聞いている。

緊張をほぐそうなどと思っているなら大きな間違い。お節介。

「………はあ」

沈黙は全然続かなかつた。黙つて、って言っただけなのに、まるで息を止めてたみたい。

「あ、あのさ、エレイン。私、沈黙ってダメなんだよね……話してくれないなら、このまま一人で喋るけど」

多少は申し訳ないと思っっているのか。

「喋らないと、もつとうるさい、ってこと？」

「そ、そういうことになっちゃうかな……？ えへっ」

諦めるしかなさそうだ。不運なことに目的地までは遠い。遙々出てきたのに、それをまた戻るくらい遠い。

一度、“グレイヴ・キーパー”のオフィスに連れて行かれたのは嫌がらせに違いない。

「学園のセンサーが生徒連れてくることは今までもあつたけどさ、エレインはあのちょー息苦しそうな制服着てないんだね」

学園は実地訓練の度に“グレイヴ・キーパー”を利用する。

学園の生徒（と言ってもハンターになる生徒だけ）は本当に息苦しそうな制服の着用が義務づけられている。

夜闇の中でも目立つ真っ白な制服は学園の紋章である太陽が刻まれたボタンやら、十字架やらで豪華に装飾されている。

特別な繊維で作られていて、よく体にフィットして動きやすいって言うけど、あたしの今の格好は黒ずくめ。ジャケットにタンクトップにジーンズ、全部安物。理由は簡単。

「あたしは許されてないから」

義務のはずなのに、あたしは例外。あのイカレた制服を着なくて済むのは嬉しいけど、例外でいるのはとっても面倒臭い。

「あそこって、ちょー厳しそう」

「そうでもないと思うけど」

「そう？」

確かに制服のせいでストイックな印象があるけど、厳しく当たられてるのはあたしだけのようない気がする。

規律がどうのこうの言ってる割に中は乱れてる。普通のハイスクールと変わらないと思う。（あたしは普通のハイスクールに行った

ことないけど」

「夜中にパーティーしたりしてるわよ」

「マジ？　どんな？　まさかゾンビ狩りパーティーとか言わないよね？」

ゾンビ狩りパーティー、なんて素敵な響き。それだったら、あたしも毎回参加したつていい。

でも、実際はそんなに素敵なパーティーじゃない。

「乱交パーティー」

「うえっ……それって本当？　あんな制服着てるのに？」

「あんな制服だから」

「わお」

学園のシンボルの太陽は莊嚴、英雄、青春、理性、真理などの象徴だけど、締め付ければ締め付けるほど爆発するみたいな感じ。あるいは、そんなことしたつて何も変わらないみたいな。

学園の生徒は決して聖人じゃないつてこと。アンデッド・ハンターはただの人。この女みたいに。

「じゃあ、エレインも？」

「まさか、あたしはどこにも仲間に入れてもらえないから」

あたしには、馬鹿なお祭りに参加するような時間はない。

あたしが行った瞬間、みんな黙って服を着ると思う。

つまり、あたしは例外で嫌われ者。

「うつわ、ちよークール！　高嶺の花つて感じ！」

そう思うのなら、このまま口を閉じておいてほしい。死体みたいに黙ってくればサイコーなんだけど。

「授業つて何やるの？　たまに実地訓練に来る以外で」

普段生徒に聞ける機会がないからか、質問が途切れてくれそうもない。

これは訓練じゃないつていうのに。

「基本的にはいつでも出られるように訓練受けてる」

「いつでも、って夜中でも？」

「夜間授業だから」

「じゃあ、今から昼夜逆転生活ってわけ？」

ハンターの活動時間は夜。昼間からアンデッドは墓から這い出してこない。太陽に焼かれて死んでしまう。

まあ、あたしが今ここに居るのは、実地訓練なんかじゃないけど。「昼間の授業受けるのはネクロマンサー」

「え？　だって、あいつら、ハンターの敵でしょ？」

そうネクロマンサーはハンターの敵、永遠の眠りに就きし者を呼び起こす存在。アンデッド・ハンターを育てる聖ソール学園には、ネクロマンサーの関係者もいる。

「保護とは言ってるけど、そんなの体裁。実際は軟禁生活で、いかに、蘇生術が恐ろしいものを徹底的に教えるの。夜は完全外出禁止」

「うつわあ……じゃあ、いつでも脅されてる感じ？」

ネクロマンサーを捕まえて親族の子供さえその道に進まないように徹底的に教育している。

そんなこと、完璧にできないから、ハンターの教育が進んでるわけ。はつきり言って、学園に捕まるようなネクロマンサーはとくに廃業してるわけで、闇に生きる者は実に巧妙に隠れている。人質にもならない。ただの見せしめ。

「ハンターの奴らの敵対意識は凄いいけど」

死霊術を使えなくとも、ハンター連中にとってネクロマンサーが家系にいた者は血が汚れてるってことらしい。

「確かに、みんな、性格きつそうだったよ。この前、来た子たちも」
あたしは実地訓練に出たことはないけど、そのメンバーくらいは知ってる。ハンター訓練生の中でも特に優秀な生徒が外に出られる。総じて傲慢で、自分を強いとか特別だとか高貴だとか勘違いしてる奴らが。

アタシは実地訓練に出してもらったこともないけど。

「あ、でも、男の子の一人は優しそうで、ちょーイケメンだった。やっぱり、学園でも有名な子でしょ？ 完璧、って感じたもん」

「“ミスター・パーフェクト” ってみんな言ってる」

「そのまんま……」

エドワード・アームストロング、学園のハンター訓練生の中ではトップクラス。

あたしの好みじゃないけど、イケメンといって差し支えはないと思う。

尤も、彼を“ミスター・パーフェクト”と初めに呼んだのはあたしだけ。それも皮肉で。

「でも、女の子の方は、本人が思ってるほど美人でも何でもないなあ、って感じだった」

「それもみんな言ってる。でも、本人はマドンナ気取り」

アンナ・メイソン、彼女もやっぱりトップクラスに入るけど、調子に乗ってるところが多々あるとあたしは思ってる。

「何か、アメフトの花形とチアって感じだよな」

「生憎、アンデッド・ハンター訓練生トップと自称トップだけだね」
実際、アンデッド・ハンターとしての教育を受けてる以外は本当に普通のハイスクールにありがちな現象が起こる。（多分、だけど）

「でもさ、エレインの方がモテるでしょ？」

「あたしはみんなから嫌われてるけど、物凄く」

「マジ？」

「ゴキブリくらい」

そう言ったら、ぴたりと彼女の口が閉じた。

でも、これは事実。あたしよりゴキブリが出た方がましかもしれない。

ゴキブリは叩き潰せるけど、マッドは潰れない。

だから、あたしがモテるなんてことはない。ありえない。誰もあ

たしに声をかけようとはしない。浴びせられるのは汚い言葉だけ。

「その“マドンナ”がさ、その“ミスター・パーフェクト”に何かとアプローチしてるんだけどさ、全然相手にされてないのが笑えた」
黙らせることに成功したと思ったのに、再起動してしまった。

「いつものこと。誰も“嘔吐きマドンナ”のお相手なんかしたくないから。ベッドの上じゃなきゃね」

別にあたしも話したくて、うずうずしていたってことはない。

口を開いていた方がましなこともある。

「“ミスター・パーフェクト”……面倒臭いからMPね。MPに『そんなに“ハーフ・ブラッド”の方がいいの!』って言ってたけど、それって何?」

「ハンターとネクロマンサーのハーフ」

それでもアンデッド・ハンターなのかって唇を割り開いて出ようとした言葉は噛み砕いておいた。学園においては当たり前、暗黙の了解なんだけど、仕方ない。

「うえっ、マジ? だって、それって敵同士じゃん?」

「聞いたことないの? 最も多くアンデッドとネクロマンサーを葬り、今も記録更新中の偉大なるハンターがネクロマンサーと結婚しちゃった話」

「伝説の男ウルフ?」

今もご存命で現役バリバリなのに、“伝説の男”なんて、何か笑える。生けるレジェンドってことなんだろうけど。

「それがアタシの父親」

「うそっ!？」

父親っていうには、あまりに希薄な関係だけど、遺伝子上は密接に繋がってる。

「エレイン・ウルフ。それが一応本名。学園じゃあ母方の姓と両方名乗らされてるけどね」

「両方?」

「あたし、昼間と夜間、両方の授業受けてるから」

「うわっ……」

「昼間はネクロマンサーの娘、夜はハンターの娘」

昼には母の姓を、夜には父の姓を、とっても面倒臭い。あたしはただのエレインなのに。

「遊ぶ時間ないじゃん」

「遊ばせる気なんてないんだから当然でしょ？」

ハンターとネクロマンサーの娘、学園はその扱いに困っている。

ネクロマンサーの娘として扱いたくても、父は学園に大きく貢献するハンターで、あたしはどっちかって言うと父の血を多く継いでいる。

学園はあたしを、ハンターとしてのあたしを必要とせざるを得ない。なんて皮肉。

「エレインは何で今まで実地訓練に来なかったの？」

「居残り授業の常連だったから」

あたしが他のハンターやハンター訓練生と衝突すると学園は思っている。大体、あっちから突っかかってくるんだけど。

それで、あたしは悪くないのにいくら消化してもしきれないくらい居残り授業が溜まつてる。

素行不良はあたしのせいじゃない。環境のせいだ。

「じゃあ、何で今日は単独なの？ 先生もいないし」

実地訓練は数名の訓練生と教官（現役のハンター）が同行する。

場合によっては学園所属のハンター（要するにただの卒業生）も経験積むために来る。

「あたしがここにるのは任務。聞いてなかった？ 余計な手出しをしたら、死ぬわよ」

訓練なんて馬鹿馬鹿しい。これは正式な任務。

本来は卒業して立派なハンターになってからだけど、十八になったら受けられることになってる。勿論、学園が承認すればだけど。

そんなわけで、あたしは一度も実地訓練に連れてきてもらったこ

とがないのに、十八の誕生日に任務のプレゼントをもらった。

尤も、非公式の仕事ならやったことがある。学園の周囲に出たアンデッドを何度も葬ってる。ネクロマンサーとも会ったことがある。課外授業として。

つまり、学園は“グレイヴ・キーパー”にあたしの存在を知らせたくなかったってこと。

それでも、今回“グレイヴ・キーパー”を使ったのは、学園側に被害を出したくないからだと思う。

今回の任務はあまりに危険で、特殊だから。

「任務？ ただのアンデッド狩りじゃないの？」

「それはあんたには関係ない。ただあたしを目的地に運べばいいだけ。運賃分のお話はしたでしょ？ 運転手さん」

“グレイヴ・キーパー”になんて期待してなかったけど、これは本当に期待はずれ。でも、とりあえず死なないと思う。

学園の読みが正しければ、だけど。

「私はヴィツキーだよ？ ヴィツキーなんだよ？」

そう言えば、そんな名前だったっけ。どうだっていい。

「うーっ……………何か喋ろーよー」

どっちが子供かわからなくなってきた。

「喋り疲れた」

「全然喋ってない！」

あたしは別に無口ってわけじゃない。

でも、普段は大体発言権がない。

「精神統一」

これは“グレイヴ・キーパー”の人間ならわかると思う。

奴らを相手にするには平常心が必要だから。

「……………MPと付き合わないの？」

ダメだった。

でも、無視。こうなったら、うるさくても聞かないフリをするしかない。

あたしは、“嘔吐きマドンナ”を一時間無視した実績がある。

たった一時間？ とんでもない。彼女の方が一時間我慢できなかったってだけ。あたしは一週間でも我慢できるのに。

散々、ないことばかり吹聴して、しまいには手を出した。

明らかに彼女に非があるのに、それであたしの課外授業がまたプラスされていくってわけ。

あたしはいつもハンターのくせに頭が悪い連中と反省文を書かされている時に彼女はパーティー。きつと、彼女の分の罰は全部あたしが受けるのに、彼女から見返りを貰ったことはない。欲しくもないけど。

「MPってエレインが好きなんじゃないの？ マドンナの感じだとそうだよ？」

“ミスター・パーフェクト”エドワード・アームストロング、女の子たちは彼のことを嫌いな女なんていないと思ってるけど、あたしは違う。

「あんまり、彼の話、しないでくれる？ 虫酸が走るから」

「え？」

「あたしたち、とっても仲が悪いの。彼があたしを学園中の笑い者にしてくれたから」

“嘔吐きマドンナ”も“ミスター・パーフェクト”も同じくらいムカつく。ムカつくの種類が違うけど、ムカつく。

あたしが“ハーフ・ブラッド”じゃなければ、マドンナになれた？

ううん、そんなことはない。あたしは別にイケてる女の子じゃなくたっていい。だって、彼女は全然イケてないから。

「あたしは連日、寝不足なの。まだかかるなら、あんたのうるさすぎる独り言を子守歌に一眠りするけど」

「もう着くよ」

サイアク。サイテー。別にいいけど。だって、あたしにいいことなんて一つもないから。

Happy Birthday Dear Elaine .

着いたのは墓地、車から降りて周囲を警戒する。

そして、何となく時間を確認する。良い子は眠る頃なのに、悪い奴は寝なくて、厄介な奴が這い出してくる。

「あのさ、エレイン。一応、言っておくと、ここは、最近、アンデッドより厄介なのが出るんだよ？ あ、ネクロマンサーって意味じゃなくてね」

親切のつもりだろうか。そんなことは知ってる。

その厄介なのが、誰なのかも。よく知ってる。うんざりするぐらいに。

「その……人間が邪魔してくるの。若い男、イケメンって話だよ。アンデッドを守る騎士って感じだって。うちの人間も何人がやられてる」

イケメン？ 馬鹿げてる。

いつからあいつがイケメンになったんだろう。

「でもさ、敵にイケメンがいるのに、うちにはイケメンがいないなんて」

「黙って！」

殺気、あたしは咄嗟に彼女を後ろに突き飛ばす。

そして、前に踏み込んで、腰から抜いた剣で飛んできたナイフを弾き返す。

アンデッドはこんなことしない。できるはずがない。

茂みの奥からそいつは出てきた。あたしは更に距離を詰めて、喉元に剣を突きつける。

「相変わらず、とんでもねえ反応速度してるぜ」

あんたは相変わらずわけわかんないわよ。

心の中で呟いて、睨む。あたしの人生はこの男のせいで何度か変

化した。今もサイアクの方向に転がり続けてる。

「そいつだよ、最近、邪魔してくる奴！　ってか、知り合い？」

ライトでそいつを照らして、ヴィッキーが叫んでる。

そう、こいつのことをあたしは知ってる。

だから、任務ってわけ。

本来はアンデッドを断つための剣、その先でそいつは笑った。

何をするか、何を言い出すかと思えば、そいつは口を開いて、歌い出した。

あたしは、そいつの歌声なんて聞いたことがなかったけど、どうせ、音痴なんだろうって思ってた。

いつもメロディックじゃないのを好んで聞いてたみたいだし、とにかくこれは意外だった。

何て言うか、セクシー。

こんなシチュエーションでなければ、こんな歌でなければ、尻の軽い女みたいに、陳腐な映画のカップルみたいに、過去のことなんかなかったみたいに、抱かれてもいいなんて思ったかもしれないぐらいに。

そう、それは墓地には、とっても不似合いな歌、ハッピーバースデートゥー。

死者が蘇生したってそんな歌は歌わない。

ハッピーバースデーアエレイン。

歌が終わったって吹き消す蠟燭はない。あるとすれば、この男の命の灯かもしれない。

「あなた、歌上手かったんだ」

誕生日を祝ってもらったからって別に嬉しくもない。誰も祝ってくれないけど、それでいい。この男じゃなければもう少しでしたっただかもしれないけど。

父さんからだって、任務に合わせてシンプルなカードとこの剣を貰っただけ。

アンデッドを斬るための剣で、最初に斬るのが人間なんてどうかしてる。それもこの男なんて皮肉にもほどがある。

趣味に合わないドレス（去年まではそうだった）とかよりましだけど。

「この日を待ち望んでたからな」

「この日のために、わざわざボイトレにでも通ったの？　馬鹿みたい」

もうちょっとで日付は変わるけど、今日はあたしの誕生日、でもなぜ、この男がそれを待ち望むのかはわからない。そもそも、この男と対峙する現状からわからない。

「素敵！」

場違いなのが一人、振り返れば目を輝かせてるんじゃないかって声。

「あんたは黙ってて！」

そちらを見ずに言い放つ。この男から目を離すのは危険すぎる。

「あんたが学園を出て、散々暴れ回って、先生たちはあんたが十八になるのを待ち望んだ　あんたの処刑命令を下せるのをね」

これは学園の問題。“グレイヴ・キーパー”は関係ない。

でも、学園の関係者をあたしに付けなかったのは何か理由があるはず。

学園は、所属するあたしでさえ欺くから。

「読み上げる必要なんてないでしょ？」

あたしは剣を持ってない右手で懷から書状を出して、見えるように開く。

書いてあることなんて、多分、この男には関係ない。

「イヴァン・ブラッドリー、あんたを学園への反逆罪で処刑する」

そう、イヴァン・ブラッドリー、ムカつくけど、あたしの初恋の男。キスだけ残して消えたサイテー男。

あの日、あいつは学園から脱走して、それからネクロマンサーに荷担した。それは学園に背く重罪。学園はアンデッドを葬る。危険

なネクロマンサーを処刑する。だから、その危険なネクロマンサーに肩入れするこの男は元学園のハンター訓練生だろうと処刑対象になる。

実際はもうちょっと複雑で、この男に学園のハンターが何人かやられてるらしい（学園は不祥事を隠蔽したい）し、元々の素行不良のせいで、更正不可能と判断されたってわけ。

悪い芽はさつさと摘まなければ、悪はあつという間に蔓延る。

この男から情報を引き出せるとも思っていないのだろう。尋問したって絶対にゲロしない。

まあ、戦争狂みたいで男で、ハンターの道を選んだのも、アンデッドとかと戦いたかったってだけ。そんな奴を入学させた学園にも問題があると思うけど。

どうせ、今度はハンターと戦いたくなっただろう。

「その剣を下ろせ、エレイン」

敵にそう言われて素直に従う奴なんていない。

「あんたの言うことなんて聞くとおもうてるの？」

「疲れるだろ」

「ご心配どうも。下がりもしないあんたはどうかしてる」

後ろには何も無いのに、喉元に切っ先を感じているなんてどうかしてる。

この剣を向けた瞬間にバックステップで回避できたはずなのに。

「てめえから逃げるつもりはねえ。ただ、少し話がしてえんだ」

あの時はあたしから、逃げたくせに。

「あんたに、その権利があるとおもうてるの？」

「理由、知りてえんだろ？」

「それを聞く権利があたしに与えられているとでも？」

処刑命令を突き付けてきたってことは、若干横暴だとは思っけど、この男に隙を与えるってことだと思っ。あたしにできると思っているのかはわからないけど。

「どうせ、てめえはいつだって、俺を斬れる。だったら、こうして必要もねえだろ」

それは事実。

「俺の誕生日、日付が変わった瞬間、何を思ったかわかるか？」

「『よし、プロポーズするぞ！』とか？」

答えたのは、あたしじゃない。わかるはずがない。

「クイズ大会じゃないんだから、あんたは黙ってて！」

「やっと始まった、だ」

ヴィツキーなんて、まるで気にしてないみたいにそいつは言う。

「そして、学園は今度はお前の誕生日を待ち望んだ」

「あたしが処刑の任務を受けられる歳になるのをね」

正式な任務を受けられるのは十八から。別にアンデッドや処刑リストに載ってるようなネクロマンサーなら、その前から殺せるけど、これは別。

「日付が変わった瞬間、何を思ったかわかるか？」

「じゃあ、今度こそ『よし、プロポーズするぞ！』だよ」

答えたのはやっぱりあたしじゃない。

どこから、そんな馬鹿な答えが出るのかわからない。

「やっと終われる、だ」

「あんたに破滅願望があるなんて知らなかった」

破壊願望はあるかもしれないけど、それが自分に向かうような男じゃない。

「元気そうで何よりだ、エレイン」

「おかげさまで。あんたは随分機嫌がいいじゃない」

こいつのことはよくわからない。でも、ここまで機嫌がいいのは初めてだと思う。

いや、大体いつも不機嫌そうだったし、そんなに喋らないし。

「てめえに殺されるなら、本望だからな。そのために今日を待っていたんだ」

「ああ、そう。あんたの望みを叶えるなんて癪だけど」

なんで、あたしに殺されたいのかわからない。でも、あたしはやるしかない。学園側は何も言ってこなかったけど、この任務に失敗して無傷ってこともないと思う。この先、ネクロマンサーの娘として扱われるかもしれない。

「理由も聞かねえのか」

「聞いたって答えないでしょ、あんたは」

あの時だってそうだった。聞いて答える男なら、何のわだかまりもなかったはず。

「話は終わった？」

「必要なことはあの時に伝えたからな」

あの時、忘れたかったことがぶり返す。

必要なことは、あたしには伝わってないのに。

不意に殺気を感じた。この男からじゃない。

もっと後ろ、ネクロマンサーとかアンデッドじゃない。

多分、学園のハンター。あたしを囷にしてるんだと思う。

引きつけておかなければいけない。

「武器を抜いて」

あたしは再び剣を構える。イヴァンは動かない。

まさか、意図に気付いた？

「あんたは大人しく斬られるタマじゃないと思う」

「確かに、それはおもしろくねえな」

「大人しく捕まる気があるなら、それでもいいんじゃない？ 泣き

ながら全部ゲロしちゃえば、処刑は取り消しになるかもね」

「残念だが、それはねえ」

そう言ってイヴァンが剣を抜く。

やっぱりネクロマンサーに荷担しているだけあって、そいつの武器は対アンデッド用の剣とは異なる。

聖なるお言葉なんて刻まれてない。いや、剣じゃない、刀。日本

刀。どこで、そんなクールなブツを手に入れたんだか。

「エレイン！」

グイッキーが叫んだ。そう言えば、彼女が銃を所持していたことを思い出す。彼女に撃たせるのはまずい。

「これはあたしの任務。あんたに攻撃する権利はない！」

援護なんていらぬ。これは、あたしとこいつの戦いだから。

それから、どちらからともなく斬りかかって、鋭い音がする。

剣が打ち合わさる音。日本刀は打ち合いには向かないって聞いた。いかに、あたしを斬って失血させるか。でも、そいつはあたしを斬り付ける気配もない。

だったら、あたしは刃こぼれさせるほど打ち合いに応じてやればいい。

多分、その隙を彼らは狙っている。彼らはあたしには殺せないと思っている。

いきなり処刑命令なんて、やっぱりおかしい。

その時は突然やってきた。何度も何度も刀と剣がぶつかり合ってお互い距離をとった時、風を切る音が聞こえてあたしはとつさに下がった。

矢はあたしの目の前を通過した。でも、これはイヴァンの援護じゃないって確信していた。

彼は確かにあたしを狙っていた。けれど、こいつはそんなフェアじゃない戦いを望む奴じゃない。

それに、その矢はただの矢じゃない。本来はアンデッド用の特別な矢。

大体は剣か銃を使うけど、ボウガンを好んで使う人間をあたしは一人だけ知ってる。その狙いの正確さも。

そう、学園のハンターは処刑対象のイヴァンではなく、処刑命令を受けたあたしを狙っている。

「エレイン！」

この場合、あたしはどうするべきなのか。

正直、あたしがイヴァンに勝てる確率は低い。こいつは学園の元首席。体術に長けてて、パワーじゃ絶対敵わない。

そして、学園のハンターがなぜかあたしを狙っている。

墓地にアンデッドの姿なし、ネクロマンサーもあらず。人間だけなんて馬鹿げた状況。

「俺の処刑が目的じゃねえのかもしれないな」

そいつは笑う。笑い事じゃない。

もう一度、矢が飛んでくる。やっぱり、あたしを狙っている。

彼に止めさせようとしても、理由を聞こうとしても無駄。他のハンターがあたしの動向に目を光らせている。

イヴァンが彼をどうにかしてくれるのを期待するのも無駄。多分、あたしはそれをやめさせなければいけない。

だとしたら、逃げるべきなのか。

否、そうしたら、あたしは任務放棄ってことになる。

茂みの奥から彼が立ち上がった。ヴィッキーがライトを向ける。

やっぱり、そこには学園のマークを胸に付けたボウガン使いが嫌な笑みを浮かべていた。

だけど、彼に気を取られるべきじゃなかった。姿を見せたのは、自分に引きつけるため。ヴィッキーはまんまとそれを助けた。くそっ！

反対側から殺気を感じた時には遅かった。学園のハンターは一人じゃないって、普通は単独行動しないってわかったのに、油断した。

どさくさに紛れてあたしを退場させる気だって、わかっていたはずなのに。

体に鈍い衝撃があって、でも、それは予想と大分違った。

すぐ側に地面を感じる。そして、覆い被さる体……イヴァン。

「なん、で……」

わけがわからなくて、どうにか、この場を逃れる方法を考えなければいけないのに、混乱してて、何でイヴァンがあたしを助けるのかって、その疑問でいっぱいだった。

「チッ……」

イヴァンの舌打ち、あたしを庇って、そいつが無事なのかはわからない。わかる前に、銃声が響いた。

「よくわからないけど、こんなの変だよ！」

発砲したのはヴィッキーだった。続いてうめき声をする。

それから、近付いてくる足音、去っていく複数の足音。

「エレイン、大丈夫？」

ヴィッキーが駆け寄ってくると、イヴァンが離れた。

「イヴァン！」

ヴィッキーに支えられながら、そいつの背に声をかける。

あたしは彼の処刑命令を受けているのに、聞きたいことは色々あるのに。

「邪魔が入って萎えた。次に会う時、てめえが俺を殺さねえなら、俺がてめえを連れて行く　じゃあな」

今度は愛してたとは言わなかった。言わなくていいけど。

でも、連れて行くって何？

あの時は、あたしを置き去りにしたくせに。

「エレイン、早く行こう？」

ヴィッキーが腕を引っ張る。彼女からは硝煙の臭いがした。やっぱり、彼女は本当にハンターだったみたい。

帰り道、ヴィッキーは何も言わなかった。

行きにあれだけ喋って、燃料切れってことはないと思う。

「なんで何も聞かないの？」

沈黙を望んでいたのに、あたしは馬鹿なことを聞いた。

「だって、聞かれたくない、って顔してるから」

「行きだって、そうだったと思うけど」

「今のエレインは無理してるから」

無理、そうなのかもしれない。

ただのうるさい馬鹿女じゃないってことは、もうわかってる。

「……ありがとう、ヴィッキー」

あたしにも丸つきりプライドがないわけじゃない。だからこそ、わかる。

今は彼女に感謝しなければならぬ。

尤も、それまでのことを詫びるつもりはないけれど。

「もし、学園の人間が来ても、余計なことは言わないで」

「わかってる。そんなに信用ないかな？」

そりゃあ、口軽そうだし、ハンターだったのが悪いジョークみたいに思える。

「マックにもハンターらしくないって言われるんだけどね。私に勝手に誇りもあるんだよ？」

その誇りが何なのか聞くのはやめておくことにした。

「マックって恋人？」

「あ、うん」

「……いたんだ。恋人」

冗談のつもりだったのに、なんか複雑な気分になった。一瞬、ひらりと動かされた右手の薬指には指輪。

「ほら、オフィスにいたじゃん。メガネの」

「あの、いかにもデスクワーク専門のクソ真面目そうなのが？」

「その通り過ぎてなんにも言えないや」

「あんたから猛アタックしたとか？」

「よくわかるね、エレイン」

別にあたしが凄いわけじゃない。見たら誰でもわかると思う。

オフィスに戻って、ヴィッキーはひどく驚いて固まってしまった。

「うそっ、なんで？ 実地訓練？ 緊急？」

そう思うのは無理もないのかもしれない。

行きに散々話題にした“MP”こと“ミスター・パーフェクト”
エドワード・アームストロングがそこにいたのだから。

「あたしは困ったってことでしょ？」

あるいは、罨とは言えるはずがなかった。

彼は学園側の人間だから。

けれど、彼は首を振って、微笑む。

「俺は君のサポートにきたんだ」

サポート？ どの口が言うんだか。

「今更？ 監視の間違いでしょ？」

「君は色々誤解しているよ」

彼は困ったような顔をするけど、誤解なんかじゃない。ただ理解の壁があるっただけ。

「それで、聞きたいことは？」

あたしは適当な椅子に座って問う。

どうせ、尋問されるならこっちから仕掛けた方がまし。

「やっぱり、イヴァン・ブラッドリーに戻る気はないんだね？」

彼も処刑命令を受けたのだろうか。

どちらにしても、わかってて問うのは質が悪い。

「戻る気があると本気で思ってたなら、とっってもお幸せな人ね」

「そうかな？ 彼にもそういう気持ちがあると思うよ」

「居場所がないって顔でしょっちゅう学園を抜け出してた男なのに？」

あいつは、そういう男だった。戻る気が欠片でもあるなら、あんなことは絶対にしなかったはず。

「君は俺なんかより、彼のことを知ってるんだろうね」

それはもの凄く皮肉に聞こえた。でも、文句を言う前に遮られた。「え？ なに、あいつとそういう関係だったの？」

「ただの同級生。学園の中じゃあ一番仲良かったって言い方もできるけど」

そう、あの時はそうだと思ってた。あいつが、それを壊すまでは。君はよく彼の部屋に忍び込んでいた

「堂々と遊びに行ってた。って言うか、入り浸り」

「それ、はつきり言っちゃうんだ……」

忍び込んでたなんてとんでもない。そんなことはしない。

「あいつ、ルームメイトいなかったから、職員寮よりはましだと思つて」

あたしにはハンターとネクロマンサー両方の血が流れてるから、どっちの寮にも入れてもらえない。

別に人種が違つとか、そういうわけでもなく、どっちも人間なのに、変な話。

「でも、結局は、あいつは出てった。未練なんて欠片もなさそうだった」

「いいや、そこに君がいるのなら、彼は戻りたいとも思つただろうね、何度も」

「何それ？」

わけわかんない。

あいつは、戻る気がないから、全て壊してった。

「だって、彼は君のことが好きだったじゃないか。いや、今でも君を想い続けてるはずだよ」

「そんなわけないでしょ？」

この男は何を言ってるの？
なぜ、それを知ってるの？

あの時、確かにあいつは、愛してたと言ったけど……

「俺も君のことが好きだったのに、彼はよほど俺のことが嫌いだったのか、散々牽制されてね。俺は君からも嫌われてしまったけど」
「白々しい」

確かにあたしはこの男を嫌ってると思われてる。

実際、それほどひどく嫌悪してるわけじゃないけど、好意は全くないと言える。

「俺は一度君を傷付けてしまった。でも、そうするしかなかったんだ」

本当に白々しい。

あたしは、そんな表情に騙されない。

「人気者になってくれて、ありがとう。 “ミスター・パーフェクト”」
「やめてくれ、エレイン。君には、君にだけは、そう呼ばれたくないんだ」

それは、もう何回言われたかわからないけど、やめるつもりはない。

大体、あたしがそう呼び始めたんだし。

あたしじゃなきゃ悪い気はしないってこと？

「毎日毎日、みんな、飽きもしないで、あたしの噂で持ちきり。でも、あたしには全く心当たりのないことばかり。それって不思議よね？」

火のないところに煙は……って言うけど、火を点けたつもりはない。

「女どもは敵意に満ちた視線を送ってくるし、野郎どもは一発やろうぜって誘いをかけてくる」

あたしと付き合いたいなんて言う奴はいないけど、一発やるのは別の話らしい。

単に、試してみたいっていう好奇心に過ぎないけど。

そう彼らに思わせるのは全部、この男のせい。

「あたしがバカンスにも行けないで、みんなに馬鹿にされてる頃、あんたは小さなビキニを付けた女の子たちに囲まれてた」

「俺はみんなとプールに行ったりしていないよ」

「でも、あたしはシミだらけになるのがわかっててブロンズ肌にしたらしい」

彼の言うことは無視する。そんなの信じない。

あたしは彼の言うことを信じるべきじゃないって思い知ったから。ダンスパーティーの時、アンジェロ・キエーザさえパートナーを決めたのに、あたしには誰からの申し込みもなかった。でも、あんたはパートナーのオーディションをしなければいけないほどだった」

「君こそ真実を言っていないじゃないか。俺は君に申し込んだのに」

確かに真実は言っていないかもしれない。

でも、それが全くの嘘だとは思ってない。

「だって、あたしはダンスを練習する暇もなくて、オーディションを受ける権利もなかったもの」

「オーディションなんてしていない。君は本当に虚言癖があるらしい」

馬鹿な話をしてると思う。

でも、彼とあたしは仲間じゃない。あの男のことを話す必要もない。

「それに、キエーザにパートナーはいなかった。彼は一人で踊っていたよ、あたかも相手がいるように」

彼の言葉にはアンジェロへの敬遠が滲んでいる。その場面では彼は友人たちと笑ってただろう。

彼はちつともパーフェクトじゃない。

「いたわよ、ナタリア・デ・アミーチス」

「彼女はただの噂だ。ダンスの亡霊だよ」

ダンスパーティーの時期になると現れるっていうナタリア・デ・

アミーチス。彼女はパーティーの前に命を落とし、今も未練を引きずって学園にいて言われている。

「それが本当にいたとしたら？」

アンジェロはハンターの中でも“変人”だと言われている。けど、あたしはそうだとは思わない。彼には他よりも優れたところがある。彼はハンターであり、サイキック。つまり、亡霊が見える男だ。アンデッドは動く死体だから誰にでも姿が見えるけど、彼にはその霊魂さえも見えてしまう。

「クリスマスには、あんたはあたしにピアスをくれた。自分が突っ込んだ女にそうやって印付けてたの？」

「あれは君が欲しがっていたみたいだから」

確かに、彼がくれたドクロのピアスはあたしがカタログで見て欲しいと思ってたものだった。

でも、彼から貰っても嬉しくなかった。

「バレンタインにはカードをいっぱいもらってたわよね。でも、あたしが誰からももらえないからって、お情けのつもりだったの？」

バレンタインに彼は薔薇の花束をくれた。

でも、それはあたしを惨めにしただけだった。

そう、彼がしてることの全てがそういうことだ。

彼はあたしを放っておくべきなのに、好きだなんて言って、状況を悪化させる。

「あんたって、本当に完璧だわ」

普通の女の子だったらとくに足を開いてると思う。

彼からプレゼントを貰ったなら、その思惑に気付かずに簡単に堕ちてしまうと思う。

でも、あたしは、そうなれない。

「学園一のマドンナがいつもあんたを、正確にはあんたの足の間にぶら下がってるブツを物欲しそうに見てるのに、あんたは見向きもしない」

アンナ・メイソンはいつだって、彼が欲しくて仕方がないらしい。

別に彼でなくともいいんだと思う。完璧な恋人がほしただけ。

頭が良くて、イケメンで、ハンターとしても優秀で……それにぴったり当てはまるのが“ミスター・パーフェクト”だったってだけ。

「別に、あたしはあんたがゲイだって何も変わらない」

「どこから俺がゲイだっていうことが出てくるの？」

「イヴァンのこと、気にしてるみたいだから」

「君は本当にマッドかもしれないね」

すっかり呆れたように彼は肩を竦める。

そんな仕草も計算されたように完璧。

ヴィッキーも、全く入り込めずに黙って聞いている。彼女の場合、口を開けば、災いが降りかかるから、それが賢明だと思う。

「ありがとう、褒め言葉ってことにしといてあげる。棒や石であたしの骨を砕けても、言葉であたしを傷付けることはできないから」

「君を傷付けたいはずがないじゃないか」

「でも、もう何度も傷付けられてる」

あたしを傷付けたことは彼自身が認めた。

「俺が好きなのは君だ」

そんなの、信じない。どうかしてる。

「入れられた時から、まともな学園生活なんて無理だってわかってた。特例ばかりで、アンナ・メイソンみたいなのに絡まれるのもわかってた。でも、あんたのおかげで、想定範囲を超えた」

伝説のハンターの娘でも、忌々しいネクロマンサーの血をなかったことにはしてもらえない。

たとえ、父さんがネクロマンサーと結婚した今でも学園から協力を仰がれてても。

それでも、それなりに上手くやり過ごせると思ってた。

「あんたは完璧だわ。でも、自分の武勇伝を完璧にするために、あたしと寝たなんて言うべきじゃなかった」

「違う。そうじゃない」

何が違うのか、あたしにはわからない。
でも、あたしが言うことは嘘じゃない。事実とは異なっても、丸つきり嘘ってわけじゃない。

彼はそういうことを否定しなかった。否、敢えてそういうことにしてしまった。

「マッドと寝たって、あなたの価値は下がらない。それって、とっても不思議だわ」

誰もが嫌うあたしと関わったって、彼は同じように嫌われたりしない。まるで、聖人みたいに。

「だって、あなたは魔女に誘惑された哀れな王子様だものね。クーガーみたいなお姫様がみんな、あなたを、正確には」

「いい加減俺の話を聞いてくれ！」

言いかけたところで、遮られた。

彼が声を荒らげることなんて滅多にないのに。

「とにかく、みんなが、あなたを慰めたいと思ってる」

ネクロマンサーの女の子でさえ彼を欲しがってる。夜の行動が制限される欲求不満な彼女たちにとって彼は最高の夜のお供。

それなのに、彼は、あたしを散々笑わせてくれる。

「アンナを黙らせるにはそれしかないと思った。君を守れると思っ
ていた」

「とんだ思い上がりだったわね、“ミスター・パーフェクト”」

「信じてほしい」

懇願するような声、でも、その意味がわからない。

「あなたの何を信じればいいの？」

それは、彼を黙らせるのに、十分だったらしい。

「エレイン……」

彼が何かを言おうと口を開く。ヴィッキーが何かを言いたそうに
してる。

でも、その空気は突然張り詰めた。

「エレイン・サンティーニ　お前を連行する」

学園のハンターだった。それも、かなり幹部クラスの。

それが、ゾロゾロと入ってくる。四人。

おそらくはあの墓地にいた人間だ。あの弓使いはいないけど。

皮肉の一つや二つ吐きかけてやりたいのに、自分を不利な状況に持ち込むのは得策ではない。

「待ってください。どういことですか？」

“ミスター・パーフェクト”が問いかける。

そんなの無駄なのに。

彼はきつと、足止めに利用された。あるいは、あたしから情報を引き出すために。

「内通の容疑、と言えばわかるな？　エレイン・サンティーニ」

淡々と告げられるけど、驚きはしない。

こうなることはわかった。初めから。

彼らは、この機会にイヴァンと一緒にあたしを葬りたいと思っている。

だから、ハンターとして送り出したくせに、今はネクロマンサーとして、あたしの名前を呼ぶ。

椅子から無理矢理立たされて、腕を後ろ手に手錠をかけられる。

だけど、抵抗すれば面倒なことになる。ヴィッキーも唇を噛みしめる。

「内通なんて……！　誤解です！」

必死に訴えても無駄。無駄。無駄。

「ごくろうだったね、アームストロング君」

ほら、あんたは利用された哀れなピエロなんだよ。

L i k e f a t h e r , l i k e d a u g h t e r .

押し込まれた車の中はとにかく居心地が悪い。

両隣を倒して飛び降りようとか、全員蹴り落としてカージャックするとか、映画みたいなことはできない。

彼らを相手に冗談で時間を潰すのも馬鹿げてる。

だから、死人のように黙って、目を閉じてることにした。

ふと、脳裏をよぎるのはイヴァンとのこと。思い出なんて可愛らしいものじゃない。

今となつては、ただ苦々しいだけの記憶。

あたしが現れるなり、そいつは変な顔をした。

嫌そうな、会いたくない相手に遭遇したような顔。

もしかしたら、始まりの場所を終わりの場所にしたくなったのか
もしれない。

後から現れたのは自分の方なのに。

屋上はあたしが占有してた。立ち入り禁止で、たまにそこでやる
奴らがいるって噂があったけど、あたしが現れるようになると、本
当に立ち入り禁止になったみたいだった。

でも、イヴァンは現れた。何度も。

あたしが先だったり、イヴァンが先だったり。でも、取り合つて
たわけじゃない。一緒にいると何となく話をした。

一番初めに声をかけてきたのはイヴァンだった。

「いつでも、消えてやるわよ。あんたがここの主^{ぬし}になりたいならね」
何となくム力ついて吐き捨てたらまた変な顔、この男のことはよ
くわからない。

「いきなり何だ？」

イヴァンは不機嫌そうに顔を顰める。

「あたしが煩わしいんじゃないかってこと」

「んなことは言ってねえだろ」

いつも機嫌は良くないけど、不機嫌になるとしたら、きっとあたしのせい、そんな風に思ってた。

否定するくせに、やっぱり煩わしそうでわけがわからない。

「あんたはうざければ自分でやれるわよね」

別に付き合ってるわけでもないし、嫌われるとか何とか、そういう不安があるはずもない。

ただ、こいつがあたしの目の前に現れてから、くだらない監獄暮らしのような学園生活が少しは面白くなったから、縁が切れたら退屈になるっただけ。ただそれだけ。

「わけわかんねえ」

「あんたの方がわけわかんないわよ」

イヴァンは言うけれど、そもその理由がわからない。変な顔の理由が何も見えてこない。

「誰か好きな子でも出来たの？」

「そんなんじゃない」

直球を投げてみたけど駄目だった。

男にも”あの日”があるの？ そんなバカなことを考えるくらい不可解。

「てつきり恋煩いかと思っただのに」

「誰が恋なんかするかよ」

あたしたちは、どうせ真っ当な生き方はしない。

恋なんて気が狂ったとしか言えないけど、イヴァンに限ってそんなことはなかったみたい。

でも、やっぱり今のイヴァンがわからない。

突き放すわけでもなく、いつものように返してくれるわけでもない。

「そうよね、種を撒き散らすしか脳がないんだから」

ムカムカして当てつけがましく言ってみた。

何か言い返してくれると思ったのに、イヴァンは何も言わなかった。

また学園まで長い道のリを行くんだと思ってた。でも、通されたのは彼らが借りてるホテルのようだった。

その一室でゆったりと、けれど、確かな貫禄を持って腰掛けてたのはあたしが一番よく知ってて、一番よく知らない男だった。

”伝説の男” ウィリアム・ウルフ、全くの予想外。

ホテルに入った時には手錠は肩からかけられたコートで隠されてたけど、この部屋に入る前に外された。

あたしは用意された椅子に座って、ただ向かいの男を見てた。

「好きに口を開くがいい」

「それで、全部、あたしに都合が悪い方に解釈してくれるわけ？」

ミスター・ウルフ

今、この状況では、彼はあたしの父親なんかじゃない。

「隠しカメラやマイクはない。お前は私の前で嘘は吐かないだろう」

「そう思ってるのはあんなだけ」

娘だからなんて特別扱いにはあたしには適応されない。

でも、いつも嘘は吐かない。本当のことを言わないってだけ。

「伝説のハンター」が尋問なんてちんけな仕事するなんて思わなかった」

他の奴らなら、この男を前にベラベラと余計なことまで喋るだろう。

この男の武勇伝が聞きたくて仕方がなくなるかも。

「お前は私の娘、そして、誇りだ」

「違う、あんたの娘じゃない。キアラ・サンティーニの娘よ」

エレイン・サンティーニ、彼らはあたしをそう呼んだ。エレイン・ウルフじゃない。

「いいか、エレイン。誰も理解してはくれないが、キアラは良いネクロマンサーだった」

そりゃあ、誰も理解しないよ。ネクロマンサーは敵、悪、それが常識。同じ人間でも闇に手を染めた者だって教えられる。

「お前は私の娘であり、キアラの娘だ。どちらの誇りも受け継いでる」

「誰もそんな風には思っちゃいないよ」

あたしはどちらでもあって、どちらでもない。中途半端にしたのは、この男。

「お前の信じる道を進め」

「そうやって、あたしを消し去ろうとしてるの？」

「そうじゃない」

彼は首を横に振った。

「今回の任務はお前には辛いだろう」

「あなたの仲間はおたしを狙った」

ごまかしなんてきかない。

わかってるんだ。あたしが学園にとってどれだけ厄介な人間かを。「メイソン派はあたしのことが大嫌いなんだよ。娘の嘘を鵜呑みにしてさ、あたしを目の敵にしているの。あんたが目障りだから」

アンナ・メイソンの両親はハンターで、でも、そのどっちもウルフには及ばない。

そして、生粋のハンターだと思ってるのに、単純に能力だけならあたしよりも下と判断されたアンナ……

あたしがいなくなれば、彼らは何もかもうまくいくと思ってる。それは大間違いだけど、アンナがあることないこと……あることは大きく、ないことはねつ造して話してくれたせいで、メイソンの取り巻きはあたしを目の敵にしている。

リーダーと次期リーダー（遠い未来のだけど）に嫌われないため

だ。

「彼らは私の仲間でもない」

それを聞いたのは収穫だったのかも。

「生きる、エレイン」

何で、そんなことを言うのか、わからない。

言われなくなつて、父親面されなくなつたつて、あたしは勝手に生きるよ。これまでも同じように。

「イヴァン・ブラッドリーを救うのはお前だ。お前だけが彼を救える」

何で、ここであいつの名前がでてくるのか、わからない。

あたしが、あいつを、救う？ 何、それ？

「さあ、行け。捕まるなよ」

連続して投げられた物をキャッチして、驚く。一つ目はあたしの物。剣だ。二つ目はハンターに支給される特殊な銃、あたしの物じゃない。

本当の誕生日プレゼントってワケじゃないんだろうけど、理由を問う暇はないようだ。

慌てて、ズボンの間に突っ込む。

ドアが乱暴に開け放たれたのは同時だった。

「ウィリアム・ウルフ、エレイン・サンティーニ、学園への反逆罪で拘束する」

まるで警察か何かにでもなつた気分なのか。

背後に腰巾着を従えて、偉そうにメイソンがあたしの前に立ちただかる。こちらの考えはもうわかつてるだろう。

「言いたいことはあるか？」

腕を捕まれる。背後で身構える気配があつたけど、ちゃんと空気は読んでくれるはず。

「娘にもつとましな嘘の吐き方教えてあげたら？ 幼稚な嘘に騙されて、全員馬鹿みたい」

メイソンとその取り巻きはアンナの嘘を鵜呑みにして何でもしちやう間抜け集団。

「知ってる？ 自分の思い通りにするために、あんたの娘が何人と寝たか」

これはアンナの嘘とは違う、紛れもない事実。メイソンの表情が歪む。

「この中にもいるかもね、変態ロリコン野郎がさ」

怒りが肌に触れた気がした。あたしはメイソンの股間を蹴り上げ、その隙に取り巻きを剣の鞘で殴り付ける。

そして、最後の一人が倒れた。

「乱暴者だな。私がかい止めてやったのに」

拳を握った勇壮な立ち姿で”伝説の男”が笑った。

暴れ足りないそうでもあったけど、あたしは走り出す。もたもたしてられない。

「あんたはどうするの？」

走りながら、後ろを走る彼に問う。

「私は私の道を往く！」

ああ、そうですか。別に、一緒に来て欲しくなんかないけどさ。いくら、”伝説の男”でも、メイソン派を殴ったのはまずいよ。状況が普通じゃないから。

「あんたはあたしが殴り倒す。せいぜい死なないでよ！」

あたしを殺そうとして、父親共々拘束しようとした。もしかしたら、この男も殺すかもしれない。

学園は信用ならない。全てがおかしくなってきた。

「誰に物を言っている？ 私は娘以外には負けはせん！」

言ってくれるじゃん。だったら、打ち負かしてあげる。全部終わった後で。そうしたら、あたしが伝説になる？

「グッド・ラック！」

そこから先は別々の方向へ走り出す。

あたしの行く先には見覚えのある車。

「エレイン！」

ドアを開けて、彼女は叫ぶ。

「行くよ！」

あたしが乗り込んで、ドアを閉めると彼女は思いっきりアクセルを踏み込んだ。

慌てて顔を茹で蛸みたいに真っ赤にして追いかけてくるメイソンが見えたけど、あたしはきつと逃げられる。

「何で？」

落ち着いたところで問いかけてみた。

「MPが、あんたがヤバいかもって。学園があんたを殺そうとしてるって」

MP、彼も信用できるわけじゃない。彼女もそうだ。

「あたしはあんたを信じていいの？ ヴィッキー」

「もちろん！」

今、信じられるとすれば、皮肉なことに、”伝説の男”ウィリアム・ウルフだけなのかもしれない。

でも、何であっても、あたしはイヴァン・ブラッドリーに会わなきゃいけない。

きつと、そこが全ての始まりで終わりだから。

そうイヴァンはあたしの始まり。

気付けば、振り返る思い出にいつもいるのは、イヴァンだ。でも、いつ裏切りが芽吹いたのか、わからない。

イヴァンはあたしの噂の陰に隠れてたけど、十分に嫌われ者だった。

好戦的な性格が災いしてた。ハンターを目指すのもそういう理由だった。

でも、”ミスター・パーフェクト”より、ずっとユーモラスだった。

あの時も意外な冗談で驚かせてくれたっけ。

「ねえ、イヴァン」

「何だ？」

男子寮の一室、イヴァンの部屋で本棚を漁りながら、あたしは問いかけた。

まるでルームメイト、最初こそ何かと文句を言ってたイヴァンもすっかり慣れてしまったらしい。

本気で嫌がってたら追い出すと思う。

イヴァン・ブラッドリーはそれができる男だ。

でも、屋上にいる時みたいに、気が向いたら話すだけ。同じ空間に一緒にいるってだけ。

「ダンスパーティーの相手決めた？」

問えば、ああ、と意外な答えが返ってきた。

近々開かれるダンスパーティーは重大なイベント。

みんな、パートナーと出たり、この機会に告白したり、馬鹿みに騒いでる。

「ウソ、イヴァンのくせに」

当然、相手なんか決めてないと思ってたこの男が既に相手を決めてたことにビックリして、あたしは思わず持ってた本を落としそうになった。

まるで裏切られたみたいない気分。

「相手、誰？」

「ナタリア・デ・アミーチス」

答えるかなんてわからなかったけど、聞いてみたら意外にあっさり答えた。

でも、それが冗談だったってすぐにわかった。

「ウソツキ。その人、ゴーストじゃない」

ナタリア・デ・アミーチスって生徒は確かにいる。いた、って言うべきなのかも。

けれど、それを知ってるのは数少なくて、みんな、噂だと思ってる。

「知ってやがったのかよ」

イヴァンは舌打ちした。

毎年、ダンスパーティーの時期になるとパートナーを探してホー
ルを彷徨う亡霊がいるって噂。

噂なんて形のないものだけど、あたしはそれが真実だってことを
今日知った。

「アンジェロ・キエーザが教えてくれた。今年は僕が彼女と踊るん
ですよ、って」

ハンターを目指す者の中でも珍しく、アンジェロは自称^{サイキック}霊能者、
だった。ハンターになるのに、特殊能力は必要ない。

アンデッド・ハンターだからって、みんな、ゴーストが見えるわ
けじゃない。ゴーストとアンデッドは別。

だから、彼は奇人変人として扱われてる。

彼ほど熱心に教会で祈りを捧げるハンターはいないと思う。

ハンターは別に、神様を信じるからアンデッドを倒すわけじゃな
いから、アンジェロは浮いてる。

「でも、あんたがそんな冗談言うなんて思わなかった」

イヴァンとは長くないけど、短いっていうほど短いってわけでも
ない。

けど、そんなユーモアのある男だなんて知らなかった。

「俺がんなクソ面倒臭えもんに出るわけねえだろうが」

そうして、イヴァンはあたしが最初に予想してた言葉を吐いた。
だから、あたしも用意しておいた言葉を口にすることにした。

「パートナーになってもらおうと思ったの」

その瞬間、イヴアンは思いっきり顔を顰めた。

「てめえは決まってるだろ？」

「あたしは決めてない」

イヴアンが誰のことを考えてるかはわかりきってる。

でも、それは相手がその気になって言ってるだけで、あたしは何とも思ってる。

「相手はすっかりその気じゃねえか」

甘い声で、極上の笑顔で、君しか考えられないと彼は言う。

誰にでもそうなんでしょ？　って言うと、彼は傷付いた表情をする。

あたしだけ、ってわかってて困らせたいわけじゃない。

彼はあたしに関わるべきじゃない。あたしは彼と関わるべきじゃない。

「彼、今、オーデিশョンで大変なの。パーティーの後の興奮を更に燃え上がらせる相手を品定めしてるの」

「出来レースだ。てめえが受けりゃあ即決まる」

この男は何にも興味がないようで、何でも知ってるようなところがある。

「何で、あたしが彼をパーフェクトにしてあげなきゃいけないの？」

”ミスター・パーフェクト”、彼はそう呼ばれてる。

イケメンで成績優秀、学園のマドンナと付き合ってると思われる。

まあ、前半はこの男にも言えることだったりする。しかも、頭の

良さと強さなら”ミスター・パーフェクト”より上。つまり、彼は全然パーフェクトじゃない。

「あんな物好きは一生に一人しかいねえだろうよ」

「あんたは違うの？」

学園の嫌われ者のあたしに声をかけるような物好きと言えば、ここにもいるわけで……

「俺は別に付き纏っちゃいねえよ」

付き纏われてる方だと言いたげだ。

最初に声をかけてきて、それからあたしが構ってる。でも、変な顔をしながら、絶対に突き放さない。

あたしたちは学園の嫌われ者。だから、似てるかと言えば、理由は全然違う。

傷を舐め合うわけでもなく、ただあたしは退屈で、こいつは煩わしいことがなくて楽だから、こうして入り浸ってるだけ。

友達なんてものじゃなかった。

恋人でもなかったけど、イヴァンはあたしをどうしたかったの？

Nothing ventured, nothing gained.

暫く車を走らせて、着いたのはアパート。

「ここは？」

予想はついてたけど、愚かな質問をするしかなかった。

「私の家。まずは休まなきゃ！」

グイグイと有無を言わさず、ヴィッキーが引つ張る。

「ここ？」

「そうだよ。」

「灯り、点いてるけど？」

ドアの前に立って、ヴィッキーがノブに手をかけるけど、それは迂闊な気がした。

「大丈夫」

笑って、ヴィッキーがドアを開けて、あたしはとっさにお腹に手をやった。そこには、あの男から預かった銃がある。

「ただいまー」

「帰ってこないんじゃないかと思ったよ」

密かに恐れたほど少女趣味でもなかった部屋であたしたちを迎えたのはヴィッキーの恋人、マックとか言ってたっけ？

「同居？」

「うっん、ちょっと頼んでおいたの」

それなら、先に言ってくれば余計な警戒をしなくて良かったのに。

いや、それでも、あたしは信じなかったと思う。安易に他人を信じられる状況じゃない。

「頼まれた通り」

「ありがとー！ マック」

紙袋がテーブルに置かれると重たい音がした。武器ならいいんだけど。

「エレイン、お腹空いてるでしょ？　すぐ用意するね」

そんな気分じゃなかったけど、ヴィッキーはキッチンに消えて、マックとやらの睨まれた気がした。

「言いたいことがあるなら、はっきり言ってくれる？　月並みな悪口じゃあ効かないよ」

アタシの心を真に傷付けたのは、イヴァン・ブラッドリーだけなのかも。

「……彼女を頼む。君よりはずっと弱いから」

文句でも言われるのかと思ったら、ちよつと予想外。いくら小さな声だからって聞き間違えたりしない。

「わかった。あたしが守る」

余計なことは聞くまい。言うまい。

巻き込むつもりはないというか、巻き込みたくないというか、巻き込まれてほしくないというか……今後一緒に行動するなんて断固拒否したいんだけど、それでも、彼女は自ら巻き込まれる気がしたから。絶対についてくるだろうから。

「何の話？」

キッチンからヴィッキーが顔を覗かせた。話に入らずにはいられない性分なんだと思うけど、今の話に混ぜたら絶対に面倒になる。

「何でもない」

「じゃあ、僕はこれで」

逃げたな、こいつ。

正直、そう思った。でも、口にしなかった。

いてもらう理由もない。いられると色々居たたまれなくなるかもしれない。

マックは全く気を利かせてくれなかったのか、目の前で湯気を立ててるのはトレーに入ったレトルトのパスタ。変な手料理を食べさ

せられるよりは、もしかかもしれないけど。

それからダイエット飲料。

「……MPがいなくて、安心した」

正直、いてもおかしくないと思った。そこまで、じゃないともわかってたけど。

「うん。だって、学園の子だもん。MPはMPなりにやるって言うてたし」

MPに一体何が出来るって言うんだらう？

実地訓練に出た回数はナンバーワン。皆勤賞。でも、彼は一人で何かできるほど強いとは思えない。

アンジェロを馬鹿にしてるあたり、頭が良いとは思えない。奇人変人で厄介な人間だと思われるけど、あたしがそれ以上に厄介な立場にいなければ彼とは友達になりたかった。

「どうするの？」

問いかけられて、パスタに突き立てたフォークを無意味にくるくる回した。

「できることなんて多分ない」

あたしの世界はぐるぐる回る。あたしはただ、巻き上げられるだけ。このパスタみたいに。

「でも、きつと、あたしが動けば、みんなが動くと思う」

中心じゃない。けど、限りなく中心に近い。

「そうだね。エレインは狙われてる。どっちからも」

イヴァン含むネクロマンサー側と対する学園のハンター側、その両方があたしの敵。あるいは、もっと複雑かも。

最早、学園のどこまでを信じればいいのか、わからない。

メイソン派の独断による排除行動とも取れる。それを学園が裏で支持してるってのはありえない話じゃない。

信用できるかどうかなんて、そんなの聞くまでもない。ノー。

「あたしは、イヴァン・ブラッドリーに会わなきゃいけない」

そうしなきゃ、状況は動かない。

「辛くない？」

グイツキーは心配そうな顔をしてる。口周りはトマトソースで汚れてるけど。

「あいつは何かを知ってる」

「危険だよ」

そんなのわかりきってる。アンデッド・ハンターは楽なお仕事じゃない。危険が付き纏う仕事。だから、ウィリアム・ウルフは英雄視される。

「逃げてちゃ、何も終わらない」

「そうだね」

グイツキーが頷いた。

「私も覚悟を決めるよ。どこまでも一緒に行く。だって、足が必要でしょ？」

「あんたこそ危険だよ。巻き込めない」

我ながら馬鹿なことを言っただと思った。言っただって無駄なのは、わかりきってる。

「もう巻き込まれてる。それに、私だってハンターなんだから」

そうだったね、今度はあたしが頷く。

それとも「ほら、やっぱり」って言うべき？

「しかも、押しの強さで男を勝ち取った頑固者」

「その言い方ビミョーだよ」

「尊敬してるつもり、かな？」

あたしには一生できないと思うから。だから、全く違うことが羨ましいのかもしれない。

「まあ、いいや。今日のところは休もう？」

暫く無駄な問答が続くんじやないかと思うほどだったけど、その境界はちゃんとわかってるみたいで少し安心する。

それでも、少し肩身が狭いとは思ってる。

「ここが安全じゃないとは思わないの？」

「え？」

過大評価はやっぱり良くないのかも。間抜けな声に少し気力が削がれるのを感じた。

「あんたの身元はバレてる。目が覚めたら取り囲まれてるかもよ？」

「学園だつてそこまで非人道なことはいらないでしょ？ イヴァンがここに現れない限りは」

間違つてはいない。でも、イヴァン・ブラッドリーっていう人間はとっても厄介な人間だ。仲良しごっこをしていた時でも、あたしはあいつを敵に回したいとは思わなかった。

それほど面倒臭いことはない。

「イヴァンは頭がいい。しかも、素行不良で、オフィスに忍び込んで資料を盗むくらいは簡単」

とにかく器用な奴だった。“グレイヴ・キーパー”の関与は考えればすぐにわかる。オフィスの場所だつて調べればすぐにわかる。

あいつはヴィッキーを知ってる。“グレイヴ・キーパー”にだって、そんなにたくさんハンターがいるわけじゃない。あるいは、誰かを脅して吐かせるっていう手っ取り早い手段だつてある。

イヴァン・ブラッドリーを甘く見ると痛い目に遭う。

「でも、イヴァンはエレインを待ってる。だから、そんな面倒なことはいらない。必ず来るってわかつてる」

一体、イヴァンを何だと思ってるのか。あいつの言ったことにどれだけ真実が含まれてるかなんてわからない。

「学園側はエレインがイヴァンと繋がってたつて形で捕まえたいんでしょ？」

イヴァンもまた学園の思惑を知った上で、彼らを誘い込みたいのかもしれない。

わかつてるのは、あたしはどこへ行っても地獄つてことだけ。

「わかつてるならいいよ。こっちの作戦決行は今日の夜」

まずは一眠り。眠れば少しは頭も整理できるかもしれない。これ

は重要なこと。十分な睡眠を軽んじちゃいけない。

それに正直くたきた。

「その計画は？」

ちよつとワクワクしてるように聞こえるのは気のせい？

「イヴァンが出そうな墓地に行く。以上」

「サイコー！」

そう、これはサイコーにイカレた作戦。クレイジー。

どうせ、あたしにできることなんて限られてる。

部屋には暮らしてる奴の性格が如実に出る。

そこは居心地が良かった。あたしの部屋に似てるところがあるから。

極めてシンプルで、唯一安らげる場所って言っても良いのかもしれない。

「何で、てめえがここにいやがる？」

帰ってきた部屋の主が顔を顰める。プチ脱走から帰ってきたことだろう。

「退屈だったから」

別にこの男に用があつてわざわざ不法侵入したわけじゃない。

ただ、何となく自分の部屋にいるのが面倒臭かっただけ。職員寮なんてろくなところじゃない。

「警戒心はねえのか？」

イヴァンは呆れている。

多分、男の部屋に単身で上がり込んでとか何とか言うことだと思っけど、愚問だった。

イヴァンだって何とも思ってないに決まってる。

「何、いかがわしいこととする目的であたしに近付いたの？」

「誰がてめえなんか欲情するか」

イヴァンは不愉快そうに吐き捨てた。

こいつとあたしは恋人なんかじゃないし、肉体関係は一切なし。友達でもないし、きつと戦友なんて言えるような絆もない。

ただの同級生、そう言い切るには親密な感じもあるけど、単に気が合うだけ。

だからって友達と言えないのは生温い言葉があたし達にはあまりに不似合いだから。

「じゃあ、何の為にあたしに近付いたの？」

こんな微妙な関係を始めたのはイヴァンから。

もしかしたら、こうなるとまでは考えていなかったのかもしれないけど、先に絡んできたのは間違いないこの男。

「てめえが女に見えなかったからだ」

何て、失礼な。

あの時だってジーンズにタンクトップにジャケットのお決まりの格好だったけど、今まで男に間違われたことはない。いくら最近の男は髪が長いとか華奢とか言っても。

大体、あの時イヴァンはあたしのことを知っていたわけだし。

「蠟人形と区別がつかねえ」

「それって褒めてるの？ 貶してるの？」

「さあな」

ホントわけわかんない。この男はいつもそう。すぐにはぐらかす。深く考えてないのか、単に面倒なのか。両方なのかもしれない。

「あんたってやっぱり変だわ」

「てめえが言うな。真っ白な女はてめえだけだ」

「どうせ、あたしはバカンスになんて一度も行ったことがないわよ。大体、将来シミだらけになるのがわかってるのに何でわざわざ苦労して焼かなきゃいけないのかしら」

あたしのことが嫌いなレディー達じゃあるまいし。むかつく。

みんなはバカンスで焦げてて、競い合ってるみたい。

その点イヴァンも白いんだけど。

「はっ、ビキニも持ってたねえ奴が僻んでんじゃねえよ」

それで、あたしを黙らせることができると思ったのか。残念。

「持ってるわよ。黒いフリフリ」

「……披露する機会もねえのにか？」

「もらっただけ。“伝説の男”に」

父親になんて言わない。あたしたちの親子関係なんて希薄そのもの。まるで他人。お互いに学園での立場が悪い。

それなのに、誕生日に限らず父親らしいことをしようとしてくる。いずれゴミになるもので、今にも切れそうな糸をかるうじて繋げておこうとしているみたい。

いつも品物選びに付き合わせている事務員の女性の趣味があんまり良くないことをわかってないし、報われないことを思えば何だか可愛そうにもなる。

「つくづく親馬鹿だよなあ」

すっかり呆れている。この学園に“伝説の男”ウルフを知らないやつなんてまずいない。

イヴァンに限っては憧れも何もないと思うけど。

「っーか、いつまでいる気だ？」

問いの裏側には『さっさと帰れ』という意味が込められている気がする。

退屈しのぎにきただけで、用があつたわけじゃないことはこの男もわかっているから。

でも、あたしは気付かないフリ。

どうせ、すぐに言われるに決まってる。

「朝まで、かな？」

「帰れ」

ほら、冗談めかして言えばイヴァンは即座に返してくる。

「あんたが寝てる内に出てくからお気になさらず」

あたしはイヴァンが寝てる頃には授業を受けなきゃいけないわけだし。

「何が、お気になさらず、だ」

「気にするの？」

「邪魔だっただけだ」

細かいことを気にしない男イヴァン、あたしの中ではそういうことになってる。

でも、全く気にしないことなんてないと思う。それぞれ事情ってものがあるわけで。

「あー、あたしがいると抜けないってこと？」

「んなんじゃねえ」

「そうよね。外に女がいるって噂になってるぐらいだし、罪悪感でもある？」

「ねえよ」

そんな理由で抜け出してるわけじゃないって本当は知ってる。

「何もおもしれえもんなんてねえだろ」

「あんたのことは少しおもしろいと思ってる」

自分から声をかけてきたイヴァン、そいつの目は驚くほど真っ直ぐだった。

他の奴らみたいに一発やってみたいとか、そういうのじゃなかった

「……勝手にしろ」

「あんたってやっぱり話がわかる男だわ」

ついにイヴァンは諦めたらしい。

きっと全部自分が蒔いた種だっけ気付いたんだと思う。あの時、自分から声をかけたりしなければ、面倒なことにはならなかったって。

でも、突き放すこともない。いくらでも、切り捨てられたはずなのに、そうしなかった。

Step after step goes far .

目が覚めて、まず枕元の武器に触れた。

“伝説の男” ウルフからの誕生日プレゼントと預かり物。

ひんやりした感触が少し心地いい。

そうして思い出すのは別の男のこと。

何度、イヴアンのことを思い出すのだろう。

夢の中で会うことだって、これまではなかったのに。忘れられる
と、思ってたのに。

好きだったこともあった。それは認めざるを得ない。
だけど、それだけのこと、とつくに終わった想いだ。

本当は何も終わっていないのかもしれない。聞きたいことが、ま
だたくさんある。

聞かなければならないと会いたい理由をすり替えているのかもしれない。

これは任務で、イヴアンは処刑対象なのだと言いつけて聞かせてる。
何でそんなことをしなきゃいけないのかはわからない。

でも、イヴアンが何か理由を持って動いてるのだけはわかった。
命を狙われてるのも、どうやら本当はあたしの方みたい。

「気分はどう？」

「クソ眠い授業に出なくて良いのってサイコー」

いつもなら起きなきゃいけない時間に寝てたって、いい気分。至
福なんて言ってられる状況じゃないけど。

ネクロマンサーの授業はとにかく眠い。作文書かされるのも眠い
し。

頭の中を整理する時間はあった。十分とは言えないけれど。

「学園のこと、本当はもつと聞きたいんだけど……」

「全部終わったら尋問に付き合うよ。何時間でも」

なんて無責任な約束。

自分が向かう先を、何が終わりなのかもわかっていないのに。

あえて言うなら、約束が果たされることはきつとない。

良くて拘束、悪くて死亡。最良の結末なんて幸福なものじゃない
ってわかりきってるのに。

「ほんと？ 絶対だよ？ 飲み物とお菓子、いっぱい用意するからね！」

輝く笑顔を見て、罪悪感を覚えるのに、それが少し幸せに思う。

平凡で、ささやかなことをあたしは知らないから。

「ダイエツト飲料はやめてよね。太りたくないならお茶とかコーヒ
ーにしなよ。ストレートとかブラックとか」

「えゝっ、砂糖とかシロップとかいっぱいいいなきや飲めないもん
！」

「じゃあ、諦めてデブになりな。あのカレシなら、どんなになっても大丈夫」

これから戦地に赴く気分だというのに、馬鹿な話をしている。
死亡フラグが立ってなきやいいけど。

ヴィッキーが支度をする間、あたしはまた武器に触れてみた。

マックが持ってきた物は武器でナイフとかいくつか装備してるけど、一番頼りになるのは史上最悪の誕生日プレゼントと、同じ相手からの一応ありがたい預かり物。聖なるお言葉が刻まれているから
って、撫でてみてもアンデッド殺しの精が出てくるわけでもないけど。

願いで叶うほど楽な仕事じゃない。

信じられるのは自分の力だけ。アンデッドなら今までだって非公式に相手にしてきた。それ以外も。

今更、ネクロマンサーにも恐怖はない。
学園が恐ろしいところだというのもよくわかっているつもりだった。

本当に恐ろしいのはイヴァンなのかもしれない。
考えていることが全くわからない。未だにあの声が耳に張り付いている。思い出す度によからぬことを考えてしまう。

「そろそろ行ける？」

「いつでもどうぞ、支度に準備のかかるお嬢ちゃん」

実地訓練と違って、悪い先輩の気まぐれにくつついていくしかなかったあたしはいつだって臨戦態勢。これからアンデッドやらネクロマンサーやらを倒しに行くかもしれないって言うのに、化粧する馬鹿はいないと思いたい。実際、いるんだけど。

ヴィッキーはまだナチュラルな方。アンナはいつも別の意味で戦闘態勢。化粧品も満足に買えないあたしとは大違い。

「そんなにかかってないもん！」

「ああ、そう」

まだ何か言いたげだったけど、続きはなかった。ヴィッキーのケイタイが鳴ったから。

「……了解です。すぐに向かいます」

つまり、それは“グレイヴ・キーパー”の指令ってこと？

会話を聞きながら、脳内を埋め尽くそうとする嫌な予感をどうにか無視する。

そして、テーブルの上に地図を広げて、窓も開け放って目を閉じる。

さすがにすっかり冷えた夜風が吹き込んできたけど、必要なこと。

「……手配中のネクロマンサーが墓地の近くで目撃されたって」

電話を終えたヴィッキーが迷ったような間を置いてから言った。

「だから、そっちに行くってこと？」

「そう。って、何してるの？ 窓なんか開けて寒いし！」

「それってさ、こっちの方向の墓地？」

あたしは地図を指で叩く。

「ううん、ここだよ」

ヴィッキーが指したのは全く別方向。

「じゃあ、そっちには行かない。行き先はここ」

「えっ、でも指令が……」

「作戦を決めるのはあたし。それに、今となつては“墓守”なんてこれっぽっちも信用できない」

手配中のネクロマンサー、そんなのはきつと、あたしをおびき寄せるための罠。

そっちから死者が目覚める声なんて聞こえない。

信じてもらえるなんて思わないけど。

「あたしと一緒に戦うつてのは、組織を捨てるかもしれないってことだよ。恋人も、何もかも」

そこまでは、やっぱり、わかつてなかったみたい。

ヴィッキーが指を撫でる。そこにはシルバーのリング、あたしから見たら邪魔な指枷だけど、彼女にとっては大事なものの。

「じゃあ、お世話になったね」

他の交通機関を使えばいいだけのこと。時間はかかっても、きつと彼らはあたしを待ってる。お金がないわけじゃないし、一人で乗れないほど世間知らずでもない。

「待つてよ！ 一緒に行くよ。そう決めたんだから」

服の裾を捕まれた。

やっぱり、あたしは守らないといけないみたい。

アンデッドが出てくるならハンターは必要だけど、正直、単純な戦力としてなら“ミスター・パーフェクト”の方が良いとも思っけど。

「あたしが脅迫してるってことにしておけばいいから」

その一言で学園は絶対に信じる。
ヴィッキーは絶対に言わないみたいな顔してるけど、あたしが言う可能性だってある。約束しちゃったから。

墓地は嫌な空気に包まれている。

元々、寄りつきたくない場所だけど、今は本当に死臭が濃い。

ズツ、ズツ……と土が掘られる音、ズルズルと引きずるように這うように地を進む音。

薄暗闇の中に浮かぶ影たちは実に不気味。

何体ものアンデッドが徘徊してる。でも、まだ出てくる。

ネクロマンサーの集団がこの一帯で蘇生術を使ってしまったようだ。墓に眠る死者全てが目覚める。

術者の姿は見えないけど。

「う、うわぁ……マジ？」

ヴィッキーが顔をひきつらせている。

やっぱり、一人で来た方がよかったかもしれない。

「何でわかつたの？」

「母親が遺した唯一の証かもね」

詳しく説明する暇はない。罨に飛び込んだ現状に余裕はない。

いつ、奴らがこっちに気付くとも限らないし。

「ハンターなんでしょ？ ビビるんじゃないわよ」

ビビる理由なんてわかりきってるのに。

「あのさ、うちが扱う案件がどんなのか知ってる？ 親族の蘇生頼んだら暴れ出したからどうにかしてくれって感じのばっかりなんだよ？」

「しかも、“案内人”がミスったとか、余計なおまけ付きでしょ？」
それは、あたしたちが何で“ハンター”かってことにも繋がる。
アンデッドを墓に戻せれば一番いいけど、大抵の場合、不可能。

でも、できると信じているのが“案内人”って呼ばれる人たち。

死者を再び墓へ導くことで安らかに……とか云々。

でも、アンデッドの質はネクロマンサーの技量に比例する。もう一度家族に会いたいなんて依頼するけど、それは大きな間違い。

制御できないアンデッドが暴れて惨事が起きるのに、そういう事件は増え続ける。ネクロマンサーもどんどん数を増やし、ビジネスが上手くなってるから。

今や蘇生を依頼するのは大きな間違いだし、その後始末を“案内人”にさせるのもとんでもない間違い、そういう場合は速やかにハンターに依頼するのが正解。聖なる武器で容赦なくアンデッドを始末してくれる。後のことは本物の聖職者とか処理班がどうにかしてくれる。

今は、手順を踏み、厳しいルールの下に行われていた時とは違う。きちんと蘇生し、墓へ返すことをできるネクロマンサーももういない。

「こういうのって、学園絡みで同行するかどうかなんだよ。それにしても、多くない？」

「だったら、もう帰りな。あたしは荒事専門だから慣れてる」

まだ帰すチャンスはある。あたしをここに運んでくれただけで十分。

学園は“グレイヴ・キーパー”ができるよりも前から、そういう集団だったわけだし。

「帰らないよ！」

その声にぴくりと奴らが反応した。

サイアク。あたしは剣を抜いて、前に出た。

アンデッド　動く死体、死んだけど死んでない。死者でも生者でもない存在。

その扱いは未だに審議されているけれど、現状では速やかに滅することとなっている。そのままにしておくとは色々まずい。

世の中にはアンジェロ・キエーザみたいな人間もいる。靈魂の叫びが聞こえる云々……彼の場合、なぜか“案内人”になるわけでもなく、ハンターになろうとしているけど。

彼の談によると本当に死者の靈魂が戻っているケースはほとんどないそう。大抵は何だか邪悪な靈がどうのこうの。あたしたちは暴れるから殺すだけ。

次第に現実を受け止め始めたのか、ヴィッキーの援護がありがたくなってくる。

でも、本当に怖いのはここから。

少し静かになった墓地に咆哮が響く。一つ、二つ、響き渡る。

腕が、薄汚れた腕が地面を突き破る。

邪悪な気配、それはゆっくりと這い出てくると側にいたアンデッドをひつつかむ。

「グールの相手をしたことは？」

あたしは目を逸らさずにヴィッキーに問う。

アンデッドと一括りしてるけど、種類はある。大抵は、かの有名なゾンビ。運が悪いと骨だけのスケルトン。

そして、一番きついのが、これ。

今、バリバリと他のアンデッド　ゾンビを食べ出したグール。人や死体を食べるとっても凶暴な奴。

「な、ないよ。あるわけない」

ヴィッキーがブルブルと背後で震えてる気がした。

普通はゾンビ止まり、グールの相手は学園の中でも特殊部隊的な荒っぽい人たちがやることだから、無理もない

「だったら、ここにはいない方がいい。もう帰りな」

「でも！」

それは一体何の意地なんだか……あたしよりも年上だから？ あたしが学園の訓練生だから？

「じゃあ、一つ約束して、本当にやばくなったら絶対車に戻って、あたしを置いて全速力で逃げるって」

「そんなのできないよ！」

できる。それができない奴は大馬鹿。危機感ゼロ。命の危機に瀕すれば逃げ出すのが本能のはず。

「奴らはあたしを生かす理由はあるかもしれない。殺す理由もあると思う。でも、あんたを生かす理由はない。殺す理由はいくらでも作れる」

いずれ、術者が出てくるはず。

そうしたら、イヴァンも出てくるかもしれない。

「あたしは大丈夫。でも、あんたまでは守れない」

グールが相手だとあたしもきつい。

やつらは、ゾンビよりもずっと強い。

「……わかった」

答えを聞くと同時にあたしは前へ出る。

食事に夢中になっている今なら、隙がある。でも、この一瞬をミスれば厄介だ。

銃を抜いて、頭を撃ち抜く。それから剣で首を斬り落とす。

何て素晴らしい斬れ味。

ゾンビを斬ったって血が吹き出したりはしない。ポンプが止まっているから。

それでも、これで終わりじゃない。まだもう一体、出てきてる。ヴィッキーに近づく前にあたしが排除しなきゃいけない。そしてどこかに必ずネクロマンサーがいるはず。さつさと術者を倒すのが戦いの基本。そう簡単に倒させてくれないわけだけど。

でも、あたしは失念してた。一人っきりで戦いすぎてた。

ここは墓場でアンデッドの素はまだいるわけで……ヴィッキーの

すぐ足下が突き破られた。

「うわっ……！」

ヴィッキーが後退する。銃を構える。あたしも駆けつけようとするけど、こっちも出てくる。くそっ！

だけど、動かない。全てのアンデッドが静止してる。

それから、拍手。

墓地には不似合いだけど、歌った奴よりまし。

あたしは音のする方へ銃口を向け、躊躇わずに引く。残念ながら拍手は止まなかった。

銃弾はアンデッドが受け止めた。盾に使っなんてなかなかやる。

Where there's a will, there's a way

「君は賢いな。未熟なところはあるが、将来が恐ろしい」

拍手をしながら出てきたのは、どこにでもいるようなジジイ。

でも、アンデッド共が周囲に集まる。紛れもなく術者。

ハンターだってネクロマンサーだって基本はただの人。

敢えて言うならネクロマンサーは大抵スーツとか綺麗なものを着てる。あつちはビジネスだから小汚い格好はできないし、自分を紳士だと思い込んでたりする。このジジイもその典型。

まあ、ハンターもハンターで自分を警察とか軍人とか法の番人とか、そんな風に思ってる。学園の制服が仰々しいのもそういうところにある。

あたしはそれに値しないみたいで着させてもらえないけど。

だから、動きやすい格好をしている。小汚くたって構わない。

「やはり、消えて頂くべきだ。あの小僧には悪いが……」

小僧ってイヴァンのこと？

どっちにしてもビンゴ。今のあたしたちとはとっても危険な状況。

彼はいつでも死者の軍勢を率いて、あたしたちを殺せる。

「だったら、あんたが先に消えたら？」

あたしは退けない。イヴァンを引きずり出すまでは。

でも、手繰る系の先に本当にイヴァンがいるかなんてわからない。その前に糸が切れるかもってやばい状況。

こいつは全然イヴァンを仲間だって思っていないし、それはイヴァンも同じことかもしれない。

「外見はキアラによく似ているが、中身は忌々しきウルフそのものだ」

「あたしはサンティーニの娘じゃない。ウルフの娘だから」

“伝説の男” ウルフに似ていると言われることを今は誇りに思うべき？

ネクロマンサーにネクロマンサーの母親に似ていって言われるのは困る。あたしはネクロマンサーじゃない。なる気もない。

でも、それは母を憎んでるってことでもない。

「エレイン・サンティーニ、君の力が必要だが、君が狼ならば私では手懷けられそうにない」

「残念、あたしは狼以外の何でもない。犬にはならない。手を噛んでほしいならさっさとだしな」

生憎、牙は外付け。特大の奴だけど、年寄りの硬い肉を斬るにはこうじゃないと。

「キアラは素晴らしいネクロマンサーだった。力の使い道を間違えたがね」

「昔話はいらない。イヴァン・ブラッドリーはどこ？」

母親のことなんて全く関係ない。それに、間違ってるのはあたしの親じゃない。

あの人は完璧に死者を蘇生することができたって言う。そして、必ず墓に還したって。

あまりに完璧すぎて再びの埋葬を拒む遺族を説き伏せることも何度もあったって噂で聞いた。

「残念だが、君は彼にはもう会えない」

できることなら会いたくないんだけど。

でも、会わなきゃいけないくて、あいつが足を突っ込んだ世界がわからなくて、自分が巻き上げられた世界さえわかってない。

ピエロは、きっと本当はあたしの方だって思う。

「たとえば、今、あんたに降伏するって言ったら？」

「何が望みだね？」

目が細められる。元々、細いんだけど。

あたしの真意を探ってる。

「イヴァン・ブラッドリー」

「ほっ？」

「ここへ来ればあいつに会えると思った。あんたに用はないの」

今のあたしの最優先事項はイヴァン。最早処刑命令に意味はないかもしれないけど、あいつに会わなきゃ何も終わってくれない。

なのに、あいつがいないなんて。

「やはり賭けは私の勝ちだった」

唇が弧を描く。勝ち、ねえ……

「ばぜ、君はここへ来た？」

「今、言っただけだと思うけど？」

ネクロマンサーも年を取ればやっぱりアルツハイマーにもなるの？
なんて、その問いの意味するところはわかってる。

「なぜ、ここへ来られた？」

問い直してくるけど、相手だってわかってるわけで、あたしの口から言わせたいなんて悪趣味。

「皆、見事に罠に引っかかってくれたよ。墓地の近くを少し歩かせるだけでいいのだから簡単なものだ」

“グレイヴ・キーパー” はあんまり優秀な集団じゃないから仕方がない。ネクロマンサーを追うなんてことはあんまり得意じゃないくせにやりたがる。全ては学園への対抗心かもしれないけど。

「だが、君はやはりキアラの娘なのだな。その才能を受け継いでいる」

才能なんて言われ方は嬉しくない。これは全く有り難くない贈り物。いつからか、ほんの微かにわかるようになってしまった。死者が目覚める気配。

「ウルフが何で“伝説の男”になれたか知ってる？」

「あの男はキアラを我々から奪ったばかりか、実に多くの同胞を殺してくれたからな」

「あの男はそれこそ狼並の嗅覚を持ってるんだよ。特にネクロマンサーに反応する」

つまり、才能だって言うならそっちの方がいいってこと。

「君は実に嫌な目をしているよ、エレイン。キアラも同じ目を見せたことがある。君をネクロマンサーとして育てないと言った時だ。」

この世にネクロマンサーはもういらないうつたあのみ……今でも私の胸を忌々しい思いで埋め尽くす」

母親の話をされても困るのはあたしが昔話でしかその人を知らないから。小さい頃に死んで、それから男手一つて言うか、学園に放り込まれたわけだし。“シングルファザー” ウルフのお涙頂戴な話も武勇伝もあたしにはできないわけ。

「蘇らせることができないのは残念だ」

母親の遺体は本人の遺言でウルフが火葬した。ネクロマンサーとして、自らが蘇生されることを拒んだってわけ。

それが、きつと気に食わないのだ。この男たちは。

「それで 本当の望みは何だね？」

「さすが、お見通しつてわけ？」

どうせ、このジジイはあたしの考えなんて浅いものだと思つてるんだらうけど。

「彼女、見逃してくれない？」

グールまで出てきた以上、どうにかヴィッキーを逃がす方法はこれしかない。

あたしは、どうにでもできる。でも、彼女はそうじゃない。

「エレイン！ 何、言つてるの！？」

背後でヴィッキーが喚いてるけど、聞こえないフリ。

今度こそ逃げてくれないと本当に困る。厄介な状況になつてるとにきつと気付いてないから。

「学園の人間じゃないし、取るに足らない“墓守”の一人」

だから、殺す価値もないはず。脅威になるはずもない。

「イヴァンに会うまでは大人しくしてるよ。それこそ死体のようにあんなのことも知らないしね」

あたしは両手をあげる。

この男に処刑の命令が出るのは確実。あるいは、既に手配されてるかもしれないけど、学園の命令があるわけじゃないし、正直構つ

てられない。

「いいだろう。私が十を数える間に消えたまえ」

男がヴィツキーを見る。あたしには妙な真似をするかと視線が突き刺さる。

一、二、三

ゆっくり良心的な速度で、数えられる。

四、五、六

ヴィツキーが動く気配がなくて、あたしは振り返る。

「早く走って！」

七、八、九……

恐怖で足が竦んでる風でもない。ヴィツキーは動かない。

「十」

「ヴィツキーー！！」

「ごめん！ でも、やっぱり逃げるなんてできないよ！ 取るに足

らないって言われたって誇りはあるんだよ！」

ヴィツキーが叫ぶ。

ああ、何てとんでもない頑固者。

誇りは時に邪魔になる。あたしに学園の誇りはない。“伝説の男

”ウルフの娘だっという誇りも、あるわけじゃない。

「交渉は決裂のようだ。エレイン・ウルフ」

パンツと男の手が打ち鳴らされた瞬間、黒い影が茂みから飛び出してくる。

あたしに一気に近付いて、鳩尾を殴ってくるそいつの顔を見た。

全部、スローモーションだった。

アンデッドにこんな真似はできない。人間の仕業。

学園の裏切り者はイヴァンだけじゃなかった。

ねえ、先輩、あんたがイヴァンをそそのかしたの？

それとも、ヴィツキーの頭に手を伸ばすそっちのあんた？

問いかけはシャボン玉のように浮かんで、弾けた。

助けようと手を伸ばせたのかさえわからない。

ただ闇に塗り潰される。

その目覚めが自然なものだったのか、五感を刺激されたものかはわからない。

目が覚めて最初に感じるのがひどい臭いだなんてサイテーすぎるあまりに濃厚な死臭だった。アンデッドと密室で時間を共有するなんてことはそうそうないから。

目が覚めて最初を感じるのがひどい音だなんて、ほんとサイアク。爆音とかそういうんじゃない。それだったら、あたしはイヴァンの部屋のデスメタルで慣れてる。

ぴちゃぴちゃと貪る音、お食事中ってこと？
全てがぼんやりしている。体は動かせない。

「おや、お目覚めかね」

淡々とした声が聞こえた。すぐ上から。

あのネクロマンサーだ。あたしを足置きにでもするつもり？ 悠々と座ってる。

「あまりに君がよく眠っているものでね」

それはどういう意味なんだろう？

よく働いてくれない頭で考えていると、無理矢理体を起こされる。女の子の髪を引っ張るなんてサイテー。ハゲたら全身の毛を永久脱毛してやりたい。

なんて馬鹿なことを考えてる暇もない。

ここは、きつとアジト。窓のない薄暗い部屋。

そして、ネクロマンサーには人間の仲間がいた。それも学園のハンターの戦い方を熟知してる奴が。偉大なる先輩が。

かつてトップ訓練生だった人さえ懐柔されている。
どいつもこいつも腐った。

「彼らが腹を空かしてしまったようだ」
他人事のように言う。それが何を意味するかわからない。
そう言えば、ヴィッキーはどこ？
探す、ここにはいない。

けれど、視線の先、離れたところにいたもう一人の先輩が笑った気がした。グールの近くで何かを拾い上げて、こちらに投げってくる。目の前にカラカラと音を立てる小さな何か。赤く染まったリング

交渉は決裂のようだ。エレイン・ウルフ

彼らが腹を空かしてしまったようだ

「うゝ につきい につきい」

その声にグールたちが反応する。そこには最早形がない。
赤黒い水溜まりと白い……

「うあ、あああああつ！」

暴れる。だけど、押さえ付けられる。

「離せ！ 離せ！ くそ野郎っ！！ この裏切り者！！」

頭の中で爆発が起きている。もう何が何だかわからなくて、がむしやらに手足を動かす。

「君との約束を反故にしたのは彼女の邪魔なプライドだ」

うるさい、うるさい、うるさい！

「それに、彼女を殺したのは彼だ。死体をくれてやって何が悪い？」
気付けば、あたしを押さえ付けていた先輩を突き飛ばしていた。

もう一人の先輩へと距離を詰める。

鼻を突く強烈な死臭、足下で跳ねる血、食事を終えたアンデッド、それよりも目の前で笑う男が憎い。

「よくもヴィツキーを！」

わざわざ、ここまで運んであたしの前で、食わせるなんて……！
「許さない！ 絶対に許さない！！」

あたしに武器はない。でも、最大の武器はある。あたしの手足を拘束しなかったことを悔いればいい。

突っ込んで、相手の反応が間に合わないまま、もつれ合う。

あたしは腕をとる。

「っ、ぐあああああっ！」

大きな悲鳴を上げちゃって情けない。ゴロゴロと転がって。その腰にぶら下がっているナイフを奪い取る。

「ウルフ、てめえ！」

「ありがとう、あたしをそう呼んでくれて」

すぐに同じ目に遭わせてあげる。

進む足下に何かが当たる。

何か、じゃない。ヴィツキー。

「あ、ああ……」

あたしはヴィツキーを掻き集める。奪ったナイフで自分の指を切る。痛みなんてどうでもいい。あたしの血がヴィツキーに溶けていく。

「そうだ、いいぞ。エレイン・サンティーニ。もうすぐお友達に会えるぞ」

うるさい、お前は黙ってろ。

何をすればいいかわかっている。

頭の中がぼーっとしている。何が何だかわからない。ふわふわしている。

ズガン！

急浮上する意識、自分が何をしてたのかわからない。
真っ赤に染まる手、硬い骨、鋭い痛み、引き離される。

けれど、またすぐに靄がかかる。

「おや、やはり君は邪魔者だな、小僧」

「邪魔はどっちだろうな、勝手なことしやがって」

この声はイヴァン？

「君は初めから我々の仲間ではなかっただろう？」

フツとイヴァンが笑った気配がした。それは肯定？ それとも否定？

「今日限りで仲間ごっこはやめるか」

「後悔するぞ」

突き刺すような声だった。はつきりとした警告、ビリビリとした殺気がそこにあるのに、遠い。

「後悔なら最初からだ」

イヴァンらしくない言葉だ。

それらは、まるで付けっぱなしのテレビから聞こえてくるみたい。

「ならば、次に会う時、それが君の……君たちの最期だ」

急に靄が晴れる。去っていく背が見える。

手を伸ばす。届かない。

「待て！」

叫ぶ。この声は届かないみたいに背は消えていく。

「許さない！ 逃げるの！？」

体が動かない。暴れても、ビクともしない。

「落ち着け、エレイン」

落ち着けるはずなんてない。

それなのに、体の力が抜けていく。

意識がどんどん黒く侵食されていく。

エレイン

あたしを呼ぶ愛しい声が響いた気がした。

A f t e r n i g h t c o m e s t h e d a y .

最初、イヴァン・ブラッドリーには関わるべきじゃないって思った。

あいつは、危険だって感じた。危険すぎるってどこかで警告音が鳴り響いてた。

誰よりも生きてるって、そんな気がしたから。

だから、生きてないあたしは近付くべきじゃないってわかってた。近付けば深みにハマって、抜け出せなくなるから。

そして、イヴァンはそんなあたしを、きつと引き上げてはくれないから。

笑って見下ろして、それで終わりだから。

それなのに、あたしは自分からイヴァンに近付いてしまった。遠ざければ必要以上に寄ってくる男じゃないってわかってたのに。

退屈は嫌だった。イヴァン・ブラッドリーという男を知った後では最早、知らないフリはできなかった。

惹かれるものがあるというのは認めたくないことだったけど。

でも、危険信号を無視した。危険な方が素敵だなんて軽い気持ちじゃなかった。

抜け出したかった。ただ生きるほどに死んでいく自分から。あたしもイヴァンのように自由にクールに生きてみたかった。

敢えて言うならば、イヴァンはあたしの憧れだった。尊敬の念さえ、どこかでは抱いてたのかもしれない。本人に面と向かって言うはずもないけれど。

「また来たの？」

屋上で二度同じ人物を見ることはない。

大抵、一度目であたしを見ると二度と現れない。

なのに、そいつは懲りなかった。そんな必要がなかったのかもしれない。

イヴァンには何もなかった。あたしがいて困る理由なんてない。いてもいなくても、大して変わりはない。

「またいるのか」

呆れたあたしに呆れ返したりして、随分余裕。

「あたしに惚れた？」

「馬鹿か、てめえは」

即答された。

あたしだつて本気なわけじゃない。自分でもふざけたことを言つたと思つて。こいつはそういう奴じゃない。

「物好きをからかうことぐらいしか、あたしにはやることないからあんたと違つてね」

退屈すぎる。何もかも退屈。

あたしは勤勉じゃないから授業は面倒。眠いし、だるいし、何で夜間と昼間両方受けなきゃいけないのかわからない。

配慮は全くなし。だから、あたしは勝手に適当にサボることにしている。要領が良くなければ絶対にやっていけない。

この男が来たからには、どうしても聞きたいことが一つあった。

「この前あんたが言つたこと、あれってどういう意味？」

意味深な言葉をこの男は残した。あたしに、このあたしに、生きると言つた。

「さあな」

イヴァンははぐらかす。

そんなことどうだっていいだろ、という顔で。どこまでも面倒臭そうだった。自分が面倒臭い男だつてわかつてるの？

「自分で言つておいて教えてくれないんだ？」

「必要ねえだろ」

聞きたいから、多分、必要だから聞いているのに、ひどい男だと思

う。

何で、この男が、あたしに、あんなことを言ったのか、本当にわからない。

目の前には壁……、じゃない天井。

天井なんて全部一緒と思うくらい取り立てて何もない天井。
見回す部屋をあたしは知らない。けれど、この空気を知ってる気がした。

そして、視界に入ったその後ろ姿を何よりも知ってる。

「イヴァン……？」

体を起こして問いかける。そいつは振り返る。

「ああ、気を失ったから連れてきた」

「ここは新しい住処ってわけ？」

「どうやって？」

「車」

「いつの間に免許なんて取ったの？　どんな車、運転してるの？」

「いや、拝借した」

「拝借って……」

つまり無免許、盗難車ってこと？

「墓地に乗り捨ててあったからな」

「それって、ヴィッキーの……」

その顔がまずいことを言ったとでもいうように歪んだ。

蘇る、悪夢のような光景。悪夢そのもの、でも、現実。
血の色、まだ固まっていなぬかるみ……

現実が悪夢でしかないなら、夢から覚めるべきではなかった。
「ヴィッキー……」

体が震える。指先から熱が失われていくような気がする。

「嘔吐き……」

守るって言ったのに、あたしは彼女を死なせた。

握り締めた掌に爪が食い込む、その手を開かされる。

いつの間にか、イヴァンがすぐ側にいた。

「エレイン」

ねえ、何で、あんたは、そんな声であたしを呼ぶの？

ねえ、何で、そんなに優しいキスをするの？

また頭がふわふわする。

あの時とは違うキスに全てを持っていかれそうになる。

大きく熱い手のひらが肩の丸みを撫でる。ジャケットは脱がされていた。

その手がタンクトップの裾から進入してこようとする。

「やめて！」

思いつき突き飛ばす。何で、こんなことになってるのか、わからない。

だけど、イヴァンはまた距離を詰めてくる。

「あんたのことを話して！」

あたしたちは、この男を捜していた。この男が全て知っているはずだから。

それなのに、背中にはベッドの感触。

押し倒されている。覆い被さられている。

「俺のことが知れてえなら、これからわかる」

あたしを見下ろして、髪を撫でる。なんて、セクシー。

でも、そんな言葉には騙されない。

「何で裏切ったの？」

「それは、どの？」

色々、裏切った自覚はあるってわけ？

「全部に決まってるでしょ？」

あたしを裏切ったことも、学園を裏切ったことも、あのネクロマンサーを裏切ったことも、何もかも洗いざらい。

「欲張りだな。だが、満たしてやるさ」

頬に触れて、ニヤリとイヴァンが笑って、ゾクリとした。

あの時みたいに、情欲を宿した目、ビリビリするいい声、でも、流されたくなかった。

こいつは何も話してない。

「本当にやめてったら！」

思いつき蹴り上げて距離を取る。

こんな時にこいつは何を考えてるの？

「エレイン、てめえっ！」

「こんな時に興奮してんじゃないわよ、色ボケ男！」

「空気を読め！」

「何でそれをあんたに言われなきゃいけないのよ！ このレイプ魔！」

一体、何の空気があるって言うの？

あたしたちは敵になったはずだった。それなのに、あたしを裏切ったはずのイヴァンはあたしを助けて、だけど、すぐに何もなかったことになるわけじゃない。そんなに都合良くない。

「傷が開いたらどうしてくれんだ！？」

イヴァンは顔を顰めて、腹を押さえてる。苦しそう……

あたしを庇って矢が刺さったってこと？

「え、うそっ、やだっ……怪我人のくせに盛ってんじゃないわよ」
そんなこと全然知らなかった。

知ってたら……って、絶対イヴァンが間違ってる。

傷の具合が気になって、イヴァンの服を剥ぐ。だって、あたしのせいだから。

「積極的だな。そういうことなら、わかった。てめえが好きにしろ」
ニヤニヤと楽しそうに笑うイヴァン、腹にも胸にもそれらしいものはない。

完全にあたしがイヴァンを襲ってるみたいな不本意な状況。

「……騙したの？」

やられた。こいつはわけわかんない奴だった。クールなようで面倒な奴だった。

「いや、傷ならこっちにあるぜ？ 掠り傷だけだな」

イヴァンが上半身の服を全部脱ぐ。

傷は肩に近い部分、包帯が巻かれてる。突っついてみたけど、本当に掠ったみたい。

あたしはよくイヴァンの部屋に行った。

お互い気にしなかったから、イヴァンはあたしのいる前で着替えてたりしたけど、こんなにしつと見たことはなかった。

よく鍛えられた上半身、ハンターらしい体をしてると思う。

思わず、触りたくなるような……

「寒い」

「じゃあ、何で脱いだの？」

「何だ？ 下も見たいのか？」

「そうじゃない」

わざとらしい奴、やることなすこと意味不明。本当に意味不明。ストリップに興味はない。ズボンの間に押し込む札もない。

「エレイン」

絶対、この声はわざとだ。わかっててやってるに違いない。

やっぱり、外に女がいたのか。そう思うとムカムカするけど。

イヴァンはまた覆い被さってくる。見上げれば、笑う。意地の悪い顔だ。

「忘れてえだろ？」

頷けば、絶対に忘れさせてくれると思ってしまっ。

「忘れたくない」

「忘れろ」

「忘れちゃいけない」

忘れた方が幸せなこともあると思う。でも、これは許されない、あたしの罪。

「だったら、思い出すな」

押し付けられた体温が、服越しに伝わってくる。直に触れた腕から溶けてしまいそう。

「エレイン」

その瞬間、イヴァンしか見えなくなった。

これ以上あらがえないと思った。

あらがい難しい力がイヴァンにはある。それは純粹なパワーじゃない。

好きだったなんて、嘘。あたしは、今でもイヴァンが好き。

今でも、イヴァンを求めている。

あたしの目を通してイヴァンも見たんだと思う。

今度はあたしからキスしたのかもしれない。

今はイヴァンが欲しくて仕方がなかった。

ここはまるで刑務所だ。

毎日、そう思ってる。

昼間も夜間も授業。

昼間の奴らは完全隔離生活、夜間の奴らは傲慢でわがまま放題。

光が似合わない奴らには真っ昼間の生活を、闇の深さを知らない奴らには夜間の生活を。

あたしはどちらでもあって、どちらでもない。

たとえ、夜間の授業をとってたって、あたしは昼間の嫌われ者。

昼間の奴らにさえ嫌われてる。

居場所がない。友達なんてできるはずもない。そんなのほしくもないけど。

屋上だけが、平和な空間だった。

初めの頃こそ、そこでやってる奴らがいたけど、あたしが現れるようになるとそんな不届き者もいなくなった。

唯一あたしが独占できる場所、何をするわけでもなく、そこにいた。

空があっても解放感はない。世界の全てが閉塞されているから。

「生きる」

そいつは、いきなりやってきて、そんなことを言った。

自分しかいないとわかっていたのに、あたしはそれが自分に向けられてるってわからなかった。

「てめえに言っただ、エレイン・ウルフ」

わかってる。何であたしがそんなこと言われたのかわからないっただけ。

「あたしが自殺するように見えるの？」

そんなのするわけない。

昼間の忌避も、夜間の侮蔑も、何とも思わない。

「さあな、てめえのことなんかわかんねえ」

自分で言っただいて、何なの？

「あんたの方がよっぽどわかんないわよ」

「イヴァン・ブラッドリー」

「知ってるよ、嫌われ者」

この男を知らない奴なんているんだろうか。

好戦的で、素行の悪さが目立つ男。課外授業さえ無視。あたしは常連なのに。

協調性は皆無だけど、それを補えるほど、ないのが納得できるほど能力が高い。

「てめえには言われたくねえ言葉だ」

ごもつとも、あたし以上の嫌われ者なんて存在しない。

「仲間意識なんていらないよ」

傷を舐め合うなんて気持ち悪い。

「んなもん何にもならねえよ」

まともなこと言う奴だっと思った。

虚言癖が悪化する一方の“嘔吐きマドンナ”や不完全な偽善者“

ミスター・パーフェクト”なんかよりもずっと。

こいつは闇の深さを知ってるって思った。

だから、あたしはイヴァン・ブラッドリーに興味を持った。持つべきじゃないとわかっていながら自分を止めなかった。

もしかしたら、この時から……

Where there's life, there's hope.

生きる

そうイヴァンに言われた時、こんなことになるとは思わなかった。でも、あの時から惹かれてたのかもしれない。そんなこと言ってくれる人なんていなかったから。

「学園はてめえを殺そうとしてる」

あたしには「空気を読め」とか言っておきながら、何てロマンティックじゃない台詞。

髪を撫でながら言う言葉じゃない。

甘さなんてありはしない。あつてほしいわけじゃないけど。

「俺は秘密を知っちまったから」

ようやくイヴァンが自分のことを話してくれた。

余韻に浸りながら聞きたいことじゃないけど。

「女に会いに行って、見ちゃいけない現場を見ちゃったとか？」

「まあ……そういうことだ」

「うわっ、不潔」

シヨック受けてるのは、認めてほしくなかったから？

女絡みだってことは否定してほしかったから？

歯切れが悪かったのは説明を面倒臭がっただけなのかもしれない。でも、イヴァンの場合、わからない。

「仕方ねえだろ、情報を掴むためだ。女は口が軽いからな」

「あんた、そういう理由で抜け出したの？」

こいつは、在学時から学園に疑問を持ってたの？

あたしは、ただ毎日消化することしか考えてなかったのに。

そう思うと、何かとっても悔しいけど。

「……だが、それが奴らの運の尽きだ」

ニヤツとイヴァンが笑った。妙にかっこいいと思ってしまうのは、

惚れた弱みとかったの？

考えるだけで寒くなる。やっぱり、こういうのは性に合わない。

「敵は多すぎる」

捨てるほどいる。学園がどこまでも腐りきってるってのはわかったから。

元々、親の関係で嫌々入れられたから、清く正しいソール学園なんて微塵も思っちゃいなかったけど。

でも、それを、まさか二人で革命でも起こそうってわけ？
ありえない。

それでも、イヴァンはやる気だった。

相手が馬鹿げたことをやらかそうとしてるのと同じように。

「一人、絶対に信用できる奴がいる」

イヴァンがそんなこと言うなんて思わなかった。

正直、こいつが誰かを信用するなんて、意外。

自分しか信じない男だと思ってた。信じられないんじゃない。信じようとしなくてもいい。完全孤高だと思ってた。

「誰？」

一体、誰がこいつの心を掴んだんだか。

嫉妬なんてあほらしいと思うけど、でも、ちよつとぐらい悔しい
と思っただけ。

だって、それはあたしじゃない。わざわざ言わないだけであたしも十分に含まれているのかもしれないけど。

「ウィリアム・ウルフ」

裸で抱き合いながら聞きたい名前じゃなかった。

何で、よりによってあたしの親父なの？

これって、ジョーク？

まあ、納得はできるけど……

「……でも、足りない」

いくら、ウルフが生きる伝説だからって、一人分にしかない。

残念なことにウィリアム・ウルフは一人しかいない。

あの男に並び立てる存在は未だに存在しない。ウルフが何人い
たら、こんなにこの世はアンデッドで溢れていない。秩序があつた
はず。

あるいは、キアラ・サンティーニが何人もいたら邪悪なアンデッ
ドも存在しなかったかも。それこそネクロマンサーは聖職者として
扱われていたかもしれない。

考えたって仕方のないことだけど。

イヴァンと同じようにウルフもまた孤高だった。

だから、もしかしたら、イヴァン・ブラッドリーが“第二の伝説
の男”になるのかもしれない。

「あいつに頼るのは癪だが……アームストロングも使える」

本当に忌々しそうにイヴァンが言う。それが何だか笑える。

「あいつは学園の手先じゃないの？」

“ミスター・パーフェクト”なんて、あたしが最も聞きたくない
名前。最悪な冗談としか思えない。

アンジェロ・キエーザだったら良かったのに。

「俺にはわかる」

妙に真剣な顔でイヴァンが言う。

何か変な感じ。イヴァンにとって彼はどうでもいい存在だと思っ
てた。

「相手はわかってほしくなさそうだけど？」

“ミスター・パーフェクト”は絶対に嫌がると思う。

「良くも悪くも、てめえのために何でもできる男じゃねえけどな」

それはイヴァンの言う通りかもって思う。

彼があたしのためにしたと思ってることは全部、裏目。あたしを
笑い者にしてくれた。的を付けてアンナたちの前に差し出してくれ
た。

そうでなくとも頼りない。無人島で二人っきりになっても絶対に
頼ろうとは思わない。

あいつと協力するくらいなら一人っきりで生き抜く。

だって、成績優秀で、何回も実地訓練に出してもらっていても、彼には足りないものがある。

彼は全然パーフェクトじゃない。欠けてるところがあるのは人間として当然のこと。

でも、彼はパーフェクトって言われる自分から抜け出せないところがある。

「学園の方はウルフがどうにかする」

もしかして、イヴァンと父さんって繋がってるの？

だから、あんなこと言ったの？

実に、不思議。気が合うのか。

うつん、聞かない方が幸せかも。

「あんたは？」

愚問かもしれないけど、聞いた。今度はこの男の口からちゃんと聞きたいから。

「俺はあのネクロマンサーを追う。あいつはとんでもねえことを考えてやがる」

それは、つまり学園の陰謀ってこと？

大体、想像はつくけど。

「どうせ、死者の軍勢率いてどうのこうのでしょ？」

「世界征服、だそうだ」

「何それ、馬鹿みたい」

薄々わかってたけど、笑っちゃうほど月並み。

子供じゃないんだから。

「それを本気で考えてやがんだ」

「あんたはその馬鹿仲間だったってことでしょ？ さぞかし、笑いを堪えるのが大変だったろうね」

笑えてきた。馬鹿の仲間なんて死にたくなる。

「言っただろ？ 俺を引き込んだのが運の尽きだ。殺さなかったこ

とが最大の失敗なんだよ」

「あんたが、正義の味方なんて悪夢みたい」

絶対、間違ってる。

「その役目はアームストロングの方がお似合いだな」

「全然、お似合いじゃないよ」

“ミスター・パーフェクト”とか言われてることを考えれば、エドワード・アームストロングは適任かもしれないけど、あたしはあれほど最悪なヒーローならない方がましだと思う。

「じゃあ、キエーザか？」

「アンジェロは名前の通り、天使かな？」

アンジェロは中身に目を瞑れば、全然名前負けしてないと思う。

きつと、天使のような子供だって言われて育ったと思う。何て美しい子でしょうって。多分、アンナもその類。しかも、それを勘違いしちゃったタイプ。

アンジェロはアンナみたいにナルシストじゃない。

「なら、文句は言うな」

「だって、あんた、喜んで悪役になりそうじゃない。実際、そうだと思うってだし」

人気のある悪のヒーローみたいな。

あたしも、そういうポジションがいいんだけど。

「てめえを守りてえからだ」

射るような真剣な表情にドキツとする。

「あたしを……？」

「一番、危ねえのは、てめえだ」

それ、本当に髪を撫でながら言うことじゃないと思う。
髪を撫でられながら、言われないことじゃない。

全然、ロマンティックじゃない。

甘く囁いてほしいわけじゃない。あたしたちにはやらなきゃいけないことがあって、それは裸で抱き合うことじゃない。

「そう思うなら、もう置いてかないで」

一人きりはもう嫌。

危ないからって、終わるまで逃げ隠れなんて性に合わない。

「俺が連れてくつて言っただろ？」

当然だって、イヴァンが笑う。

でも、それは、あたしを悪の仲間につきずり込むってことじゃなかったの？

「あんたは平気であたしを裏切る」

そう、いつも通りクールに嘘を吐く。キスだけ残して消えたように、あたしを捨てられる。

「平気なんかじゃねえよ」

平気なもんかよ、イヴァンが吐き捨てる。

「ずつとてめえと一緒に戦いたかった」

わからない。いつも一人で戦ってたくせに、あたしと一緒に戦って何になるの？

「それが叶わねえなら、いつそてめえに殺されたいとも思ってた」

それ、本気？

だから、あいつらの仲間になったの？

この男が脅しに応じるなんて思えないけど、でも、学生にすぎないから？

「あんたの自殺の方法にはなりたくない」

「ああ、もう死ぬことなんて考えてねえ」

その言葉を聞いてほっとする。

あたしにイヴァンは殺せない。だから、そうなるくらいなら、殺してほしい。

でも、こうなった以上、もう離れたくはない。

「ねえ、連れて行ってほしいところがあるんだけど」

ベッドの中でおねだりなんて、あたしらしくなくて吐きそう。

でも、これはそんな甘い話じゃない。

「奴らのアジトなら知ってる」

放っておけば、イヴァンはあたしをそこに連れて行ってくれるだろう。でも、そこじゃない。そこに行く前にあの場所に行かなきゃいけない。

「昨日のところ」

「あいつらはもう戻らねえ」

裏切り者のイヴァンとあたしに知られた場所に戻る馬鹿は本物だと思う。どうしようもない自信家とか。

「あたしはヴィッキーを守れなかった。でも、代わりにやるべきことがあるの　お願い」

約束を守れなかった。でも、そのままにしたいくない。

「わかった。でも、そう何度も“お願い”は聞けねえからな」

「ありがとう、イヴァン」

「そう思うなら態度で示せよ」

「あたしの感謝が伝わらないなんて鈍いんじゃないの？」

イヴァンの要求がわからなかったわけじゃなかった。

でも、すぐに応えるなんて癪。

「俺はアームストロングみてえなお人好しじゃねえからな」

「その名前聞きたくない」

「見せつけてやりてえくらいだな」

サイテー、笑って吐き捨てて、それからイヴァンにキスした。

この後、起こることを考えると気が重くて、今は吐き気がするほど甘い誘惑に溺れていたかった。

Never say die .

新聞にはヴィッキーのことは書いてなかった。
でも、惨劇の現場には“墓守”と“案内人”と“学園”が揃って
る。

“学園”って言うても含みがあるんだけど。

「守るって言うたくせに！」

マツクは掴みかかってきた。あたしは黙ってそれを許す。

あたしに彼をはねのける権利はない。だって、当然のこと。

殴ればいい、でも、彼はそうしなかった。

できなかったと言った方がいいのか。

弱々しく崩れ落ちて、あたしは何を言ったらいいかわからないま
ま、床についた手にそつと指輪を握らせた。

イヴァンによれば、あたしはそれをずっと握り締めていて、なか
なか離さなかったらしい。

全く覚えてないんだけど。

あたしの中であの時のことは既に不明瞭になっている。

忘れてはいけないと思ってるのに、もやがかかっている。

あたしは自分が何をしようとしたのかも覚えていない。無責任に
もほどがある。

「無事で良かった！」

“ミスター・パーフェクト” あるいは“ミスター・学園”は
今にも抱きつかんばかりだった。

もちろん、それは拒否する。と言うか、それを許さない奴がいる。

「よお、完璧野郎」

ニヤニヤと笑っているに違いない。隣に立った男に視線を向けな
くとも、気配でわかる。

「イヴァン・ブラッドリー……」

苦虫を噛み潰したような、絞り出した声、あたしは更に追い打ちをかけてやることにした。

「あたしはイヴァンと行くから」

「まあ、そういうことだ」

こいつは間違いなく“ミスター・パーフェクト”の反応を見て楽しんでる。

わざと刺激しているのがわかる。決戦前、最後の楽しみなんてことはあるはずない。

前菜にもならない。

むしろ、誰もが楽しみにしてるメインディッシュが待ってるのに、その前に胃もたれさせるような最悪のメニュー。

そのまま、あたしたちは学園のもつと悪い人たちが来る前に退散することにした。

“ミスター・パーフェクト”の声が聞こえたような気もしたけど、イヴァンのバイクの爆音がかき消した。

どこへ行くかなんて聞かれたって教えるつもりはない。

これ以上、役者はいらぬ。死ぬかもしれないのは、あたしたちだけでいい。

でも、希望が全くないわけじゃないから。

風を切って、どこまでも二人で行けたならロマンティックだったかもしれないのに、行き先は冥界？

バカンスにはまだ気が早い。

あいつらがいる限り、お楽しみはない。

「ここ？　なんて聞くまでもないわね」

墓地、それもネクロマンサーが待ち構える墓地なんて正解以外の何でもない。

「やあ、若い恋人たち。最期のデートスポットへようこそ」
まるでいつかの光景。

「救いようもないセンスの悪さ」

「ジョーク？ それとも、マジ？」

「だろ？」

イヴァンが笑う。これに堪えてきた自分を褒めるとでも？

「二人仲良くあの世に旅立つがいい」

ネクロマンサーがステッキを手にしている。それで地面を突く。
怖気立つ嫌な気配、あつと言う間にアンデッドだらけ。

「生きて帰るぞ」

イヴァンがあたしの肩を叩く。

そして、剣を構える。あのクールな日本刀じゃなくて、対アンデッド用。ただし、学園のじゃなくて、“墓守”が使うようなの。つまり、あんまり良いものじゃない。ただの剣同然の代物。

あたしには“伝説の男”からのプレゼントと預かり物がある。

イヴァンは凄かった。

学園にいた時から追隨を許さないって感じがあつたけれど、それは増している気がする。

二人で次々とアンデッドを倒して、背後から突然襲いかかってきたグールにもイヴァンは冷静に対処した。

そして、ネクロマンサーを追い詰める。

両方向から剣を向けられたその男は笑っていた。

ステッキを振り上げる、あたしが受け止める。イヴァンが足下に剣を突き立てる。アンデッドが苦しむ。

そう、あたしとイヴァンが一緒なら最強だっと思った。

ついにイヴァンの剣がネクロマンサーの胸を貫いた。

「ふ……」

それは漏れた苦痛の声だと思った。呻きだと思った。けど、

違った。

「ふははははっ！」

胸から剣を生やして男が笑った。最期を彩るように渾身の力で派手に。

でも、これで、終わりじゃない。これからが始まりだと言うように。

イヴァンは急所を外さなかった。

間違はなく死ぬのに、それを全く恐れていない。あっけなく終わる気はないらしい。

「何がおかしい？」

不快感を露わにするイヴァンの問いに彼が答えることはなかった。バタリと男が倒れた。死んだのだ。それなのに、安心できない。あっさりし過ぎている。墓地の規模に対してアンデッドの数も少なかった。

違う、まだ終わってない。

「やばい！」

あたしはとつさにイヴァンの腕を引いた。

まがまがしい気配、ネクロマンサーの周りに渦巻いてる。

息が詰まるほど、濃い瘴気、恐ろしくなってイヴァンの腕を必死に掴む。

イヴァンも何も感じていないわけじゃないと思う。

でも、これはあたしだからわかるのかもしれない。

やばい、やばすぎる。助けてほしい。あの人が生きていたなら、どうにかできたのかもしれない。

いますぐにウルフにきてほしい。

あたしはとにかく怖かった。

「ふはははははっ！」

もう一度、笑い声が響く。恐怖による幻聴じゃない。

「礼を言おう。若い恋人たち」

今度はもつとはつきり聞こえた。死んだはずだ。胸を貫かれて、それなのに、何事もなかったかのように立ち上がって笑ってる。うつん、何事もなかったわけじゃない。

「リッチ……」

唇が震える。ありえない。あつてほしくない。そう思うのにわかっている。

まだ死にたてて瑞々しい体をしてるけど、やがては洩れる。

「その通りだ。キアラの娘」

バツ、とネクロマンサー、否、リッチと化した男が両の手を広げる。風が起きた感じ、違う。まわりついてくる。

「チツ……、どうなつてやがる？」

イヴァンが焦ってる。

凄く嫌な感じ、のしかかってくるような……これはまさか噂の悪霊つてやつ？

急に強い光を感じた気がした。でも、見えたわけじゃない。正確には何か暖かい波動のようなものだった。けれど、あたしはそれを光だと思った。

重かった空気が急に軽くなったのだ。

「だから、僕は常々、この業界における優秀なサイキックの必要性を唱えていたんですよ」

思わず振り返れば、そこに天使がいた。羽もわつかもないけど。

彼が今とても神々しく見える。アンジェロ・キエーザ、やはりその名前は彼にはよく似合っている。

「じゃあ、帰ったら論文書きなよ」

軽口も言えるくらい恐怖が和らいだ。

「是非ともそうします。その時は協力お願いしますよ」

「それで貸し借りはなし？」

「もちろん」

微笑んで、アンジェロが一步前に出る。光が強くなった。

「僕じゃアリツチを消滅させられません。わかりますね？」

アンジェロは振り返らない。でも、あたしとイヴァン、もう一人に向けられてた。

「加勢するよ」

“ミスター・パーフェクト” エドワード・アームストロング、彼が隣に並ぶ。

「フン……」

一瞬目をやってイヴァンが鼻を鳴らした。この男を待ってたくせに。

「今、君のお父さんが学園の方を抑えた」

「ああ、そう」

“伝説の男” ウルフがいてくれたら、なんて思っちゃいけない。あたしたちはあたしたちでやらなきゃいけない。

アンジェロの光に対抗するように闇が強まる。ゾンビ、グール、スケルトン アンデッドだらけ。多分、霊体も色々。

でも、デッドしてないのが、混ざってる。学園の先輩、ヴィッキ―の仇！

三人同時に踏み出した。アンジェロを守るようにする。ゴーストの類は彼に任せざるを得ない。

あたしたちはがむしゃらに戦った。そうするしかなかった。

疲れてきて、それでも剣を振るって、気付けば、先輩二人とリツチしか残ってなかった。

先輩の一人はMPとやり合ってる。

もう一人はヴィッキ―を殺した！

「許さない！」

「よせ、エレイン！」

あたしは復讐の虜、流れを乱したこともどうでもいい。イヴァンの声も遠い。

一撃は受け止められた。けれど、手を止めない。何度もあたしは

斬りかかる。さすが、かつては優秀な生徒だったのが納得できる。
でも、悪に魂を売った。

「ダメだ、エレイン！ 殺しちゃダメだ！」

“ミスター・パーフェクト”が何か言ってる。でも、そんなのどうでもいい。

ヴィッキーは殺された。だから、この男は生きてちゃいけない。
ヴィッキーに比べれば生きている価値もない男、生かしておく必要がない。

どうせ、片方を生け捕りにすれば、他の仲間のことだって吐かせられるはず。学園の方だってウルフが抑えたんだから。

「くそっ、エレイン！」

あたしは気付かなかった。スケルトンがまだ潜んでたなんて、不死の戦士らしく、短剣を持ってたなんて、全然気付かなかった。
それがあたしを狙ってたなんて。

「ぐうっ……」

イヴァンが呻いた。またあたしはこの男に守られた。

「イヴァン・ブラッドリー！！」

自分が戦っていた相手を気絶させたエドワードが叫んだ。

「う、おおおおおっ！」

イヴァンはスケルトンを力任せに倒し、峰打ちでもう一人の先輩を気絶させた。

でも、何かおかしい。

「イヴァン？」

「心配すんな、なまくらだ」

「そんな……」

イヴァンの腕には短剣が突き刺さってる。

「大丈夫だって言ってたんだ」

イヴァンはあたしから剣を奪い取って、足下のスケルトンに突き立てた。アンデッドは普通の剣では簡単に倒せないから。あたしの銀の剣の方が確実。何せ、ありがたいお言葉付き。

「最後はてめえだ、エレイン。撃ち抜け！」

残るはリッチだけ。それをあたしに託すなんてどうかしてる。

「エレインさん！」

「エレイン！」

アンジェロもエドワードも、あたしは……復讐に取り付かれてイヴァンを、みんなを危険に曝したのに。

うつん、だからこそ、その責任をとらなくちゃ。

あたしは剣を引き抜くでもなく、お腹に手を当てた。預かり物の銀弾入りの銃。

「どいつもこいつも役立たずめ！」

リッチが喚き散らす。あたしは銃を構える。

「援護します！」

アンジェロが光を放った。彼も多分、そろそろ限界。

あたしは、引き金を引いた。銀の弾を撃ち尽くした。全部、命中だった。やがて、リッチの体、穿たれた穴から煙が出てくる。

そして、今度こそ終わりだった。

Epilogue

ネクロマンサーに荷担してた学園側の人間は一掃された。
これで綺麗さっぱり終わりってわけじゃないけど、ひとまず終わり。

まだ外にはたくさんのネクロマンサーがいるけど、学園を立て直すっていうのがある。

また伝説を増やした英雄ウルフは似合いもしないのに、きつちりとした制服を着てる。

学園の先生が着る奴。いつもは外担当で非常勤だったから、好きな格好してたけど、これからはそういうわけにもいかない。

でも、明らかに着せてもらってる感じ、ちょー似合わない。

そんなことを考えてたのがバレたのか、睨まれた。そして、咳払い
「エレイン・ウルフ、エドワード・アームストロング、アンジェロ・キエーザ、今日からお前たちは教官だ。心して指導にあたれ」

あたしとエドワードとアンジェロ、三人は仲良く並んでる。真新しい制服を着てるのはあたしたちも一緒。

あれからトップで卒業したあたしたちは生徒たちの指導係に任命された。

卒業したら、学園所属のハンターとして動くのは当たり前のことなんだけど、大抵は雑用を経て段々上に行く。

それなのに、あたしたちも英雄扱いで即実戦に使えることを大して歳の変わらない生徒に教えなきゃいけない。

全部、学園側に膿が溜まってたせい。穴埋め的な。

「何か言いたげだな？ エレイン」

「やっぱ、ウルフは紛らわしいと思うんだ。サントーニの方でいいよ」

早速、廊下を歩いてたらウルフ教官、って声をかけられたんだ。

本当に英雄効果。あたしはいつの間にか人気者。大人気。

でも、もう一人ウルフがいるわけで複雑。

「ミスとミスター、教官と主任で区別がつく」

この男は主任になった。あるいは、総隊長的な、ハンターの編成を一任される偉い人。多分、その言葉以上の権限を持つてるけど。

「比べられるし」

「今更だ」

そうなんだけど、こう複雑な気分。

「そんなにサントニー二を名乗りたいなら、昼間に送り込んでやる」
幸いというべきか、昼間　ネクロマンサー科の奴らには裏切り者はいなかった。完全に学園に忠誠を誓ってるとていうか、恐怖刻まれてるっていうか……

あたしはそっちも卒業したことになってるから、よくわかる。

「それ、いいですね！」

アンジェロが顔を輝かせた。

「僕、靈魂についての講義を両方でやることになってるんですけど、何か心細くて……だって、アウエーですよ？」

今回のことで一番脚光を浴びたのはこの男かも知れない。

初めて学園側からサイキックと正式に認定された上に、戦闘において有用だと判断され、サイキックの発掘・指導を一任され、昼間と夜間で教鞭を執らされるほど。

何て言うか、スターそのもの。

「それも嫌」

アンジェロは嬉しそうだけど、あたしはそういう気分にはなれない。

屋上に行くと、そいつは既にそこにいた。
つまらなそうに空を見てる。俺だけ置き去り、みたいな。

そう思うと笑えてくる。

「笑ってんじゃねえよ」

イヴァンが顔を顰めた。

この男も真新しい制服を着てる。この男の場合、生徒用の。前のはもうないからって新しいのを作らされた。

「ウルフのせいだ。俺の功績に免じて卒業扱いにしてくれりゃいいのに」

忌々しそうにイヴァンは言う。そう、この男は卒業できなかった。そもそも、卒業できるはずがなかったんだけど。

「復学でただけで奇跡」

元々、学園を勝手に辞めたこの男、ネクロマンサー側に荷担してたけど、真の目的はそれを止めることで、ウルフに協力していたことが評価され、何と再び学園に戻れることになった。

もちろん、条件があつて、一年分遅れを取り戻すこと。つまり、留年扱い。

「何で、てめえが卒業できたんだ」

イヴァンは不服そうだけど、男の嫉妬って面倒臭い。

「あたしは優秀だから」

元々嫌われ者だったけど、成績は悪くなかった。

「メイソンがいなくなって、何もかも変わったか」

「パパメイソンがいなくなって、取り巻きも一掃された。マドンナ気取りのアンナも追放されて、その取り巻きだった奴は必死にあたしの機嫌をとろうとしてさ、笑える」

父親が学園の敵として追放された以上、その恩恵を一身に受けてやりたい放題してたアンナが学園にいられるはずもない。

「俺だって、英雄の一人だぜ？ それなのに、後輩どもは俺と目を合わせないようにしてる」

イヴァンは不満そう。自分が英雄だなんてどの口が言っただか。

「あんたのその、“俺はヒーローなんだぜ顔”がいけないんじゃないの？」

偉そうにしちゃってさ、扱いは留年生なのに。

「ヒーローだからな」

「ダークなヒーローでしょ、あんたは」

あたしを巻き込んで一緒に消す毘だったとしても、一度は処刑命令が下ってる。

“墓守”が関わるとうるくなことになるからって撃退したり、学園の追撃をかわしたりしてたのは、先輩二人の方らしいけど。

実際に手に掛けたりしてたのは、先輩二人の方らしいけど。

「それが格好いいんだろうが」

それ、本気で言ってるの？

「呆れてなんにも言えない」

「てめえは俺を何だと思ってるんだ」

「裏切り者」

いくら目的があつたって一度あたしを裏切つたのは事実。

あたしにだけは真実を伝えてくれたってよかったんじゃないの？

「そりゃあねえだろ、エレイン。てめえの男に向かつて」

学園に戻ってきて、立場に差が出た以上あたしは強気に出る。――

応、監督しなきゃいけないってことになってるし。

「無事、卒業できたら認めてあげるよ」

今度は勝手に行かせたりはしない。

「つれねえなあ」

イヴァンが近付いてくる。うわあ、面倒くさい。

「エレイン、主任が呼んでる」

突然入ってきたのはエドワード、ナイスタイミング。

「チッ……邪魔しやがって、完璧野郎は空気読んでる」

イヴァンにとってはバッドなタイミングだったみたい。何せ、イ

ヴァンはエドワードに逆らえない立場になった。

「ブラッドリー君？　俺、君の論文の面倒を厳しく見るように言われてるんだけどなあ……」

笑ってるけど、腹黒い部分が見えてる。あたしは甘やかすからダメって言われたけど、エドワードとアンジェロはこの男の指導をすることになってる。

アンジェロはとっても忙しいから、手伝い程度らしいけど。

「くそっ！ どいつもこいつも！」

イヴァンは拗ねたみたいだった。でも、これが平和ってことなんだと思う。

いずれ、また戦いの時がくる。でも、あたしたちはきっと、戦える。

二メートル下に眠るその時まで。

Epilogue (後書き)

これにて『Six Feet Under』完結です。

当初の予定とは全く違うエンディングになったりもしましたが、翻訳小説風(ティーンの女の子向け)を目指し、サイト用の小説とは違うテンションで楽しく書けたかなと思います。

ここまで読んで下さった方に感謝です。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624o/>

Six Feet Under

2011年10月5日03時26分発行